

# 小田原史談

第 181 号

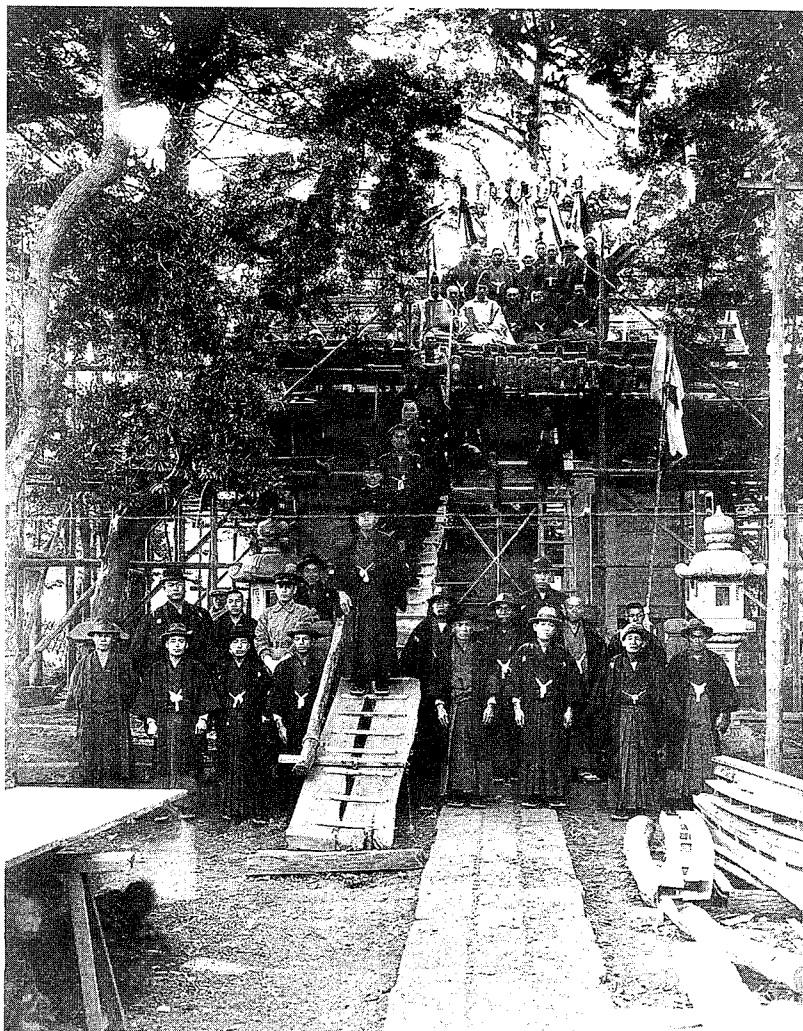
発行所 小田原史談会

小田原市栄町2-13-20

アオキ画廊内TEL(24)0637

井細田いさいだ  
(小田原市  
扇町三丁目) 八幡神社の

拝殿落成式



(中戸川武雄氏蔵)

大正十二年(一九二三年)の関東大地震後の八幡神社の復旧落成の記念に撮影したものである。写真は、中戸川武雄さん(扇町三三三六)が所蔵している。

写真は可笑しみのあるものとなっている。悪童?の三人が左下に隠れているからだ。プロの写真師が撮ったにしては失敗作であるという向きがあるかも知れないが、むしろ子供が隠れているのを承知で写したとも受け取れる。

い事のとときの服装のわけだ。女性は一人もいない、今では考えられないことだが。社の屋根の特設席後ろには、ノサ五柱が立っていて、左側には鎗矢がある。今では見られなくなった光景である。

※

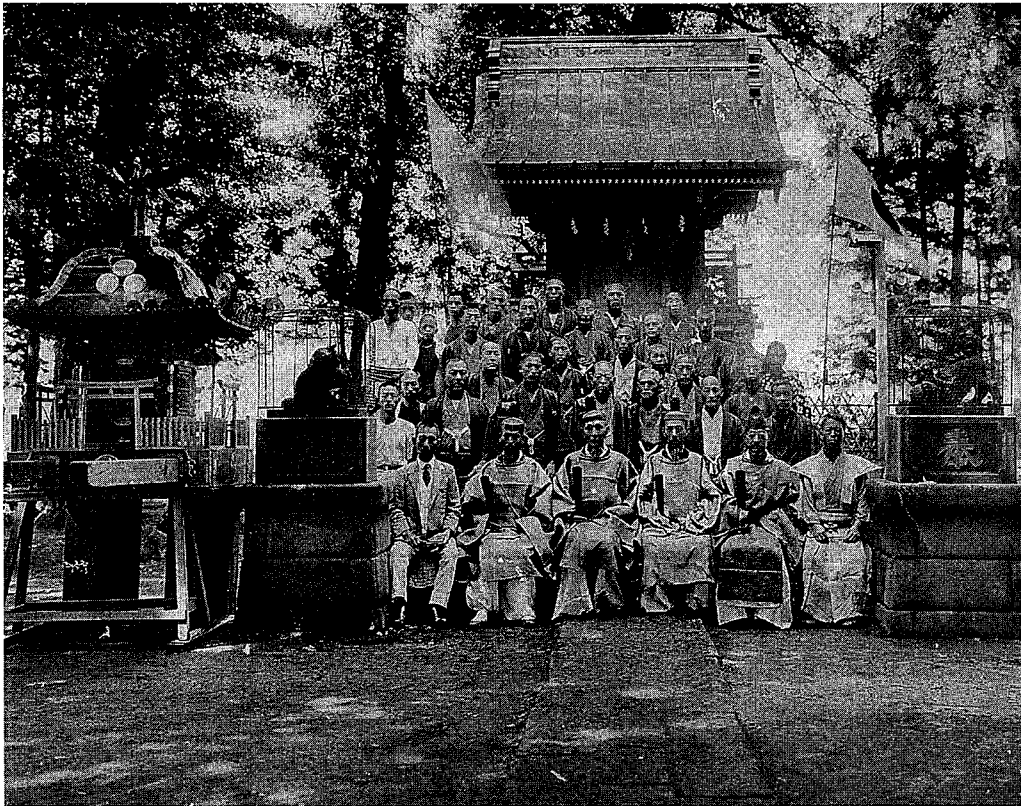
ところで、ノサについて初めて耳にする人が多いであろう。無理もない。『日本国語大辞典』にも、『古語大辞典』にも載っていない。掲げられているのは、ノサキである。この言葉は、荷前が転訛したものといわれており、年末に諸国から初穂として奉られる貢ぎ物のことで、陰曆十二月に荷前伊勢大神宮初め諸陵墓に奉り、残りを天皇が受納した、とある。これでは意味がびつたりしない。この言葉よりヌサの言葉が適していると思われる。「ヌサ(幣)は神に祈るとき神前に供える物。また、罪けがれを祓うために出す贖物。上古は木綿・麻をそのまま用いたが、のちには織った布や帛、さらに紳など用いた。……(以下略)」(『古語大辞典』)

ノサ(NOSA)とヌサ(NUSA)に転換しやすい言葉である。あるいは転訛した言葉かもしれない。

左手の鎗矢は、大部分が木に隠れ見えにくくなっている。現在、注文住宅の建前るとき、形式的に取り付けられていることがある。

本来は、古くから用いられ、射る風を切り音響を出すようになっていて、魔を払う呪術的なものである

写真は当時  
の風俗を映し  
出していて貴  
重であるし、  
また、興味深  
い。洋服を着  
ているのは、  
チョボ髭を出  
した駐在さ  
ん、在郷軍人  
の徽章をつけ  
た軍服姿、他  
に制服を着た  
二人のを合わ  
せて四人だけ  
である。中折  
帽や山高帽を  
被った人、紋  
付き羽織袴の  
人はほとんど  
が白い羽織紐  
を付けてい  
る。かつて祝



(山口博司氏蔵)

といわれる。やがて儀礼として用いられるようになると、神前で射る他に、合戦を始める合図の矢合せに用いられたという。

※

ところで、この写真が撮られた年

月はいつ頃か尋ね回ったが、残念なことに全く分らない。当時を知る人はいなくなっている。拝殿は、本殿とは別に後になって建てられたというところだけは伝えられている。写真は、本殿再建記念で写されたのか

それとも拝殿の時のものかも初めは区別つかなかった。

それが漸く分かったのは、山金洋品店主の山口博司さん(扇町二一六―三二)を尋ねてからであった。

山口さん宅は旧家で、博司さんで七代目といわれる。近くにある足下地蔵尊で歌われた、江戸時代のご詠歌を記した文書や、先祖からの記録が伝えられている。代々金七を名乗り、昔は紺屋をしていたと云う。父君の喜一さんの代には、店は、

通称油屋で通った。喜一さんは、長男で東京日本橋の夏沢香料に勤めていたところ大阪支店長を命じられたため、家に戻って香油やビン付け油を製造販売したので油屋と呼ばれるようになった。洋品店となったのは大正時代のことで、山金洋品店と呼ぶようになったのは、昭和十七、八年頃から戦後にかけてのことだと、博司さんは云われる。

山口さんは、奥から大判の写真を持ち出してきた。見れば、本殿をバツクに写されたものだった。落成記念写真である。裏面には、撮影月日の大正十四年九月と入っているではないか……。

井細田の八幡神社の祭礼が行われるのは、九月十八、十九の両日である。この日あたりに落成式が行われたのであろうか？

分からなかった拝殿の落成式の年月も、うっすらと浮かび上がってく

る。昭和に入ってからのことになる。

山口さんは更に倉庫から帳面を取り出してきた。掛買の際、品名・金額を記入する通帳かどとぎを利用したものであった。表紙には「神社拝殿寄付金帳」と墨で書いた紙をはりつけ、その両脇に「昭和二年」「十一月」ペン書きで添えてある。

当時、山口さん宅では組長をしていて、組内十五軒の寄付金を取り纏めたものであった。寄付金は、各組に割り当てられたと考えられる。

寄付金帳に記された昭和二年十一月は、拝殿の建築落成式の年月であろうか。

本殿と拝殿の二枚の記念写真を比較すると、参列している人の服装が違ふ。

この本殿のほうは、明らかに九月の季節を表している。一方、拝殿の写真は、秋から冬に移ろうとする時期である。拝殿の建築落成式は、昭和二年(一九一七)十一月と推定できると思う。本殿の復興は、大正十二年(一九二七)九月一日の関東大地震からちょうど二年目に、拝殿は、大地震から四年目に落成が成ったこととなる。

※

二枚の写真に載る人の名を知るのも大事なことだ。そこで年配者に尋ね回った。

まず、本殿の写真から記す。

前列に五人の神官が並んでいる。向かって左から三人目が、八幡神社

神主の観行裕保さん。彼は、明治三十一年(一八九六)、小伊勢屋の尾崎亮司と共に、『函東会機関紙の『函東会報告誌』足柄部の編集員になったことがある。足柄尋常高等小学校の先生を勤めていた。現在は、孫の観行英紀さんが、神官を継承し隣接する熊野神社(小田原市中町)を守り、井細田や穴部など八幡神社の神主を兼務されている。

ついでながら、熊野神社には観行松と呼ばれた巨木があり、千度小路の漁師が帰帆する良い目標となつたと聞くと先年枯れた。

右端の西山清さんは、師範学校を卒業すると足柄尋常高等小学校に赴任、現在も健在で、湯河原町宮上・五所神社の前神主。西山さんの隣の近藤金之助さんは、国府津・菅原神社の神主で、やはり足柄尋常高等小学校に勤めていた。

ことによると、観行裕保さんが、小学校同僚の神官に語らつて、関東大地震後、復興した八幡神社の落成式を、盛り立てようと誘つたのかもしれない。

二列目の左から三人目は、中戸川靖一さん。中戸川宅は、長屋門を構えた旧家で、村人は姓を呼ばずに「本家」と呼んだ。その名残で今も本家と言つたのが通りがよい。井細田の草分けである。先祖の彦左衛門は、妙円寺の開基で、代々井細田村の名主を勤めた家柄である。長男の文彦さんは、戦時中、フィリッピン

沖で、輸送船と運命を共にした。中戸川さんの左隣は、栢沼寅吉さんで、表通りの県道(扇町二一〇〇)で、米屋を営んだ。後列の二段目の右から三番目は、下田寅吉さんで、表通りの県道(扇町二一七一一二)で、同じく米屋だった。

次に拝殿の写真に写る人達を追つてみよう。神社の屋根の特設席に並ぶのは、神主の外氏子総代と棟梁であろう。神主の右隣は呉服商大坂屋・石川彦兵衛さん(扇町二二八一九)で、足柄村村長を勤めたこともある。

代々、彦兵衛を名乗つたようだ。孫の謹一郎さんは、姉三人で一人息子であつたが、昭和十七年(一九三三)一月、現役兵として入営、甲種幹部候補生として中国大陸で従軍中、病で倒れた。

後の左側に立つのは中戸川大助さん。中戸川武雄さんの父君に当たる。井細田で南とは中戸川家を指して云い、製粉業を営んだ。現在は米穀の販売が中心になつている。昔は、北側の久野川の流れを利用した水車を動力にして粉挽きをしたと伝える。

武雄さんの弟の慶三さんは、東京帝皇国大学経済学部卒業後、銀行に勤め将来を属目されていた。やがて予備学生として海軍に召され、海軍主計中尉に任官していたが、南の海で輸送船と共に運命を共にした。代々井細田村の名主を勤めた家柄なのに、当主の中戸川靖一さんの姿

が見受けられないのはどうゆう訳なのであろうか。

一人おいて立つ山崎定雄さんは、明治三十八年生まれで、昭和六十年に亡くなつている。健全ならば今年九十四歳になる。現在は長男の庸正さん(五十五歳)が豆腐屋のあとを継ぎ四代目、盛業中である。

山崎さんの隣で顔を出しているのは、鈴木助三郎さん。井細田で西といへば鈴木さん宅を指し、農業であつたが、戦後の農地改革と更には農地の宅地化で、伴の平八さん(故人)の代で貸店の西丸ストア(扇町二一六六一六)に転換した。

仮設の段上三番目は本多成二さん旧小田原藩の士族であつた。いまは、孫の純二さんが、三代目の時計店(扇町二七五)を継いでいる。郊外の大型店の進出と共に衰退傾向の井細田商店街にあつて、店にチャイムを設置し、定時間がくると時刻を近隣に伝えるなど積極的経営をしており、商店街のリーダー役として活躍している。

その下は清水義三さんで、表通りの場所(扇町二一一六)で電気商會を営んだ。拝殿の前に立つのは各組から推薦か、あるいは輪番で代表となつて参加している人と思われる。

右手で光頭を見せている大川喜助さんは、昔から続く瀬戸物店(扇町二一六四四)を継承し、ちゃんわん屋の愛称で親しまれてきた。昭和七、

八年頃隣接の空いていた貸家を利用して、井細田商店街共同の形で雛人形の売り出しを始め、やがて大川商店単独で営むようになり、時期がくると人形店を開くようになり、今でも継続されている。喜助さんは昭和四十年に六十歳で亡くなった。あとを相続した長男の進さんは、若き日、陸軍士官学校に入学したが、在学中、敗戦を迎え家業についた。市内桑原の商業団地に進出し、積極的に問屋として手広く陶磁器の販売を始めたが、一昨年の平成十年、七十三歳の生涯を閉じた。

右手三人目は「曲げ師屋」と呼ばれた折箱屋の瀬戸与助さん(扇町二一六四四)であると指摘する向きもあるが、家族の確認を得ていない。白井さんと言われる人の右隣は、吉田梅吉さん(扇町二一〇一七)で、おそらく輪番で組の代表で出席したと思われる。家業は建具職で注文仕事をこなしていた。長男の正夫さんは、鉄道建設事務所勤めてたが、日華事変勃発により、いち早く召集され、北支戦線で戦死した。

写真に載る人全員の氏名が分れば、それぞれの方を、今ならば年配者から聞き出すことが出来るであろう。それは、全部ではないにしてもある程度、井細田ムラの構成が、人を通じて浮き彫りになるのではないかと思われる。しかし、永遠に時代の波の中に没してしまうのかと思うと残念なことである。(岡部忠夫)

# 追補 鴨宮を發祥とする星崎姓について

石井 啓文

『小田原史談』第一七三号(平成十年三月刊)に、表題の星崎姓について発表したところ、これを読まれたパソコンに堪能な知人から、パソコンソフトから全国都道府県別星崎姓の電話加入世帯数を教えていた。それを集計したものが次の表である。

この表からも、星崎姓が希少姓で、神奈川県以外は僅少であることから、鴨宮を發祥とする本論が裏付けられる。ただ、宮崎県の38が注目され、同県電話帳を調べたところ、半数の18を東諸県郡高岡町が占めており、しかも、18全てが同町上倉永に集中していた。そこで、同町役場に問い合わせたところ、同町教育委員

都道府県別星崎姓電話加入数

8	4	0	1	2	6	3	0	0	1	0	1	0	3	0	0	3	1	0	2	0	3	8	1	6	0	
重良山賀都阪庫取根山島口川島知媛岡賀崎本分崎島繩																										
歌																										
三奈和滋京大兵鳥島岡広山香徳高愛福佐長熊大宮鹿沖																										
児																										
347	14	0	0	0	0	0	0	0	1	0	3	1	4	6	9	26	158	0	0	0	0	0	10	11		
国道森手田形城島潟梨野馬木城葉玉京川岡山川井知阜																										
海																										
奈																										
全北青岩秋山宮福新山長群栃茨千埼東神靜富石福愛岐																										

の所職をもつていた人物であろう。(後略) 穆佐院とは、島津荘の寄郡のこと

で、現高岡町を含む範囲を指します。大慈寺文書の記載から、南北朝時代には、「星崎」がすでに村として存在していたよう

この説明から、高岡町の星崎姓は明治になってからの姓であることが判明し、鹿児島県の16も分散しており、同町からの分布と推定できる。従って、「鴨宮を發祥とする星崎姓」の論稿は、大筋で間違いないと言えよう。

「星崎」の歴史については、日本歴史地名大系『宮崎県の地名』(平凡社)の「星崎」項が参考になる、という書出しから、『現上倉永の字星崎を遺称地とする。文和五年(一二二五)二月二十八日の畠山直顕書下写(大慈寺文書)によれば、志布志大慈寺(現鹿児島志布志町)の山門造營料所として土持新兵衛入道の旧領であった「穆佐院内星崎村」が寄付された。同日付の左兵衛尉等連著書下写(同文書)には下地遵行の伝達役として野本将監がみえており、野本氏は当地付近になんらか

です。江戸時代になると、星崎村は上倉永村の一部となり、「星崎」の名は「星崎門」という門名として残りました。門とは、中世以来南九州に存在する、土地を耕作する単位(権力側が土地を把握する単位)で、薩摩藩の場合、一つの門内に「名頭」と呼ばれる一家と、「名子」とよばれる数家が所属しました。一般的には、これらの家々は百姓に属します。そして、明治以降になり、この「星崎門」に所属した家々が「星崎」姓を名乗るようになったと考えられます。また、先の南北朝時代の「星崎村」とのつながりですが、江戸時代の「星崎門」がその系譜を引くと考えてよいのではないかと思います。

因みに、星崎城のあった名古屋星崎町の由来も、「本地村に星の宮あり、これより出たる地名なり(尾張志)」と、「元久二年(一二三三)の海鳴・明星の珍事から、鳴海・星崎の地名が生じた(徇行記)」と、記している。以上、宮崎県高岡町の星崎姓が判明したことと、「星崎」の由来について述べさせていた。矢作と下新田の星崎姓が、全く別々に起こったものか、由来と共にますます興味が増すばかりである。今後とも情報とご指導を下さいますよう、お願い申し上げます。

以上、大変簡単ですが、わかる範囲のことを回答いたします。現在では、「星崎村」があったと思われる地区は、本崎地区と名前をかえています。八坂神社を地区の中心に祀り、比較的古いたたずまいを残しています。また、機会がありましたら、ぜひお越し下さい。(原文のま、)

この高岡町を始め、星崎は、希少姓であるだけに「星崎」本来の由来を記す文献は全く見られない。福島県に多い「星」姓は、星宿信仰と呼ばれる星祭りをした家の名字であると言われ、群馬県に多い「星野」姓も、同様の信仰から星祭りをする野原に居住する者が名字にしたという(『名字と日本人』(文春新書))。しかし、こうした説は推察論であって論拠に乏しい。「星崎姓」もこうした「星」に対する信仰か、憧れからではないかと推察することができるとは……。

なお、高岡町からは先に示した丁寧なるご返信と共に、「高岡町の文化財」及び「天ヶ城歴史民族資料館」のパンフレットをいただき、感激した次第である。機会をつくり是非尋ねてみたい場所として楽しみが一つ増えたと思っている。

# 小田原叢談

(三十九)

## 石井富之助

### 庄司甚右衛門と久米平内

小田原の出身あるいは小田原に関係のある者で、異色の人、すなわち毛色の変わった人間を探すとすると、さしずめ庄司甚右衛門と久米平内を挙げなければなるまい。庄司甚右衛門は江戸吉原の開基として、久米平内はいわゆる男伊達としてともに有名で、年輩の方は多分御存じにちがいない。

国書刊行会叢書、燕石十種一卷の『墨水消夏録』の中に「庄司甚右衛門伝」がある。それを御紹介しよう。

庄司甚右衛門は相州小田原の産で、その名を甚内といった。その頃高坂甚内という大盗がいたので、名を甚右衛門と改めた。正保元年(二六四)甲申十一月十八日没。六十九。『洞房語

園』にいう。庄司甚右衛門は小田原の産で、又は北条家に仕えた者である。天正十八年(二五〇)に小田原が落城した時、この甚右衛門は十五才で、折柄病氣にかかっていたが、その家来の介抱によって江戸にくだり、柳町に縁故の者がいたので、そこに住んでいるうちに傾城屋になりさがつた。これをはじめて一生父の名字をいわなかったが、別に出所を知る者がいて子孫に語り伝えた。しかし、これは甚右衛門の本心とはちがうことなのでしらすなかつたという。甚右衛門の姉はおしょうといて、氏政公のちよう妾であった。甚右衛門の異名を君がてて又

はおやじといった。故に元和の頃の小唄に「おやじが前の竹れんじ、其一ふしのなつかしや。おやじが前の竹れんじ、せめて一夜はちぎらばや、ちぎらばや。親父が前の竹連子、いくよも千代もちぎろもの、千代も八千代も契ろもの」考えてみるに、いくよも八千代もともに甚右衛門の家の名とりの太夫で、その名を唄い込んだのであろう。

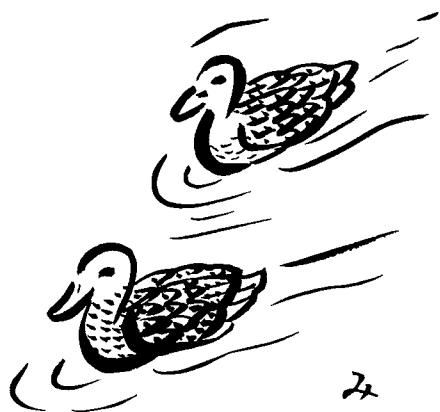
庄司甚右衛門については、その六代の孫にあたる庄司勝富の書いた『洞房語

園異本』や『新吉原町田緒』その他いろいろの本に載っている。真偽のほどはわからないが、庄司甚右衛門が小田原の人であったということはどうやら定説になっているようである。

江戸の町人文化は吉原をのぞいては考えることはできない。その吉原の開基が小田原の人であったということは、ちよつと面白い話ではない。

前と同じ国書刊行会叢書、『近世風俗見聞集第二』の『久夢日記』に「稲葉丹後守家臣小波又左衛門」のことが記されている。

延宝三乙卯年(二六五)五



み

子枝美田内カット

月、相州小田原の城主、稲葉丹後守殿の家来に小波又左衛門として、取次役を勤める侍がいた。風流の男伊達で、麻布の下屋敷に住んでいたが、ここから上屋敷へ出勤していた。当番で上屋敷へ出か

ける時は十六、七の美女二人に派手な化粧をさせ、左右両方にめしつれて行き、上屋敷の門のところから帰した。元来強きをくじき弱きを助ける男伊達の気性であったので、殿様仕えはどうも工合がわるい。そこで永の暇をもらい、浪人となり久米平内左衛門長盛と号して、浅草の鳥越あたりに住み、金貸を業とした。自分の着物にはすべて南無阿弥陀佛の六字を小紋に染めさせて着、丸ぐけの帯をいつもしめいていた。情ぶかくて人をあわれみ、なんざしているものはすくい、貧乏で娘が嫁入りざかりになっても行けぬものには、金銭を与えて縁組をさせるというふうであった。近所の人々はこれをありがたく思い、平内左衛門が病死すると、その恩を忘れないために、浅草寺の境内に石像を立てた。平内左衛門のほたい所は駒込小名木なわての海蔵院に位牌がある。

久米の平内といえ、こどもの頃  
に講談本で読み、また浅草のお観音  
さんの境内にある「平内さん」にお  
詣りしたこともあって、まことにな  
つかしい名前である。それがまた小  
田原城主稲葉丹後守の家来となる  
と、一層身近に感じられて、さらに  
ほほえましさをおぼえる。

しかし、さすがのわたしもこれは  
少しおかしくはないかと思った。そ  
こで大百科辞典をひいてみると、平  
内左衛門長盛は九州の浪人で剛勇な  
る武技の達人であった。年若くして  
江戸に來り、内藤丹波守政親の家来  
となったと書いてある。

あんまりいい加減に書くなど叱ら  
ないで下さい。大百科辞典だって、  
あとの方に、「平内の伝記には古来幾  
多の異説があつて、正鵠を得るを難  
しとする」と記してある。してみる  
と結局はわからないのである。

これがしかつめらしい歴史研究だ  
と、資料が薄弱だとかなんとか文句  
をつけられるが、お話ならば喧嘩に  
はならないであろう。平内さんが小  
田原の人だといつても、別に今まで  
の学説がひっくりかえるわけでもな  
い。ほかに影響がないならば一つの  
話題として面白がつてもいいじゃあ  
りませんか。

### 明治の書簡でつづる

## 相田軍曹と日清戦争(七)

無残、澎湖島の戦い

瀬戸長治

#### 出征の連絡

(宛名)

神奈川県足柄下郡早川町  
相田なを殿

(差出人)

廣島市横町17 津村利助方  
相田代吉

(文面)

しなにくるときは しらせませす

一筆しめしまいらせ候。さてわたし  
も、其のちかわりなくくらしお候  
ま、おんあんじなさるまじく候。  
いまだしなにくのはわからず、ま  
いにちけいこのみいたしをり候。ひ  
ろしま八東京よりもあたたかかよう  
に候。まことに、わたしも明治十八  
年四月より三年、おまへにくろ  
うかけ、それからなんだかだどて  
くろうかけ、またこのたびハ一方な

はじめに

「相田家文書」について、相田家系表 略図

☆ 弥生館から浦賀へ	明治27年9月1日	海蔵寺住職の賀状(代吉あて)	明治28年1月2日
弥生館に宿営(相田代吉より弟相田慶吉あて)	9月5日	国府津停車場で面会を	
無事入隊を祝し(磯吉より代吉あて)	9月6日	(早川村杉崎五衛門、林為之より代吉あて)	1月30日
面会に参るべく(磯吉より代吉あて)	9月10日	面会後、家族無事帰着(磯吉より代吉あて)	2月5日
馬車鉄道で無事帰着(磯吉より代吉あて)	9月20日	七日十時の面会について	
浦賀町駐留の兄(磯吉より)	9月24日	(石田弥五平より代吉あて)	2月5日
駐留地移転の連絡(代吉より相田本家あて)	9月28日	☆ 廣島から澎湖島へ	
慰問品の発送の知らせ	10月2日	出征の連絡(代吉より妻あて)	(以上二七五、一八〇号)
(石田弥五平より代吉あて)	9月28日	話によれば台湾へ(代吉より妻あて)	2月13日
鈴木善左衛門の慰問文(相田代吉あて)	9月28日	乗船を前に(代吉より相田本家あて)	2月23日
駐留宅への状	10月2日	馬関(下関)港にて(代吉より相田本家あて)	3月5日
(兄に代わって磯吉より三浦郡、石井支所あて)	9月29日	海軍の参戦(代吉より磯吉あて)	3月8日
帰省用洋服持参の依頼(磯吉より代吉あて)	11月4日	敵皇に近接(代吉より磯吉あて)	(以上本号)
☆ 東京麻布第三聯隊	11月26日	澎湖島の戦い(代吉より相田本家あて)	3月14日
(東京)見物において(代吉より妻あて)	11月26日	熱病に犯されて	3月21日
留守宅への指示(代吉より妻あて)	12月20日	(第八中隊部下一同より磯吉あて)	3月28日
前村長の死去	12月20日	お悔やみ(采神村廣石政吉より代吉妻へ)	4月14日
(根府川、廣井長十郎より代吉あて)	12月18日	第八中隊長からの書簡(相田代吉家族あて)	4月30日
帰省申請書		表紙状(足柄下郡兵事報務会長)	5月1日
(早川村外四力村組合役場より代吉あて)		従軍記章之証(賞賜局総務)	9月26日
		あとがき、発見された紙筆	11月18日

#### 相田なを殿

(差出人)

在廣島横町17 津村利助方  
後歩一ノ八  
相田代吉

#### (文面)

一筆しめしまいらせ候。さてわたし  
も、無じまいにちけいこいたしてお  
り候へば、おんあんしん下さるべく  
候。いまだ支那へまいり候。いまだ  
何れをそかれはやかれ、まへること  
にあいなるべく候。はなしによれば、  
台湾とのことに御座候。

#### 話によれば台湾へ

(宛名)

神奈川県足柄下郡早川村

一、  
 義・斧二ハまいにち学校にまいり候  
 や。わたしおらずば、あまくなるだ  
 ろうから、よくよくおんころつけ  
 なさるべく候。  
 こめかみにてもかはりなきや、車の  
 たけ・おきんさん、其ほかしんるい  
 にはよろしくおんつたへ下さるべく  
 候。  
 廣嶋ハ見るものもこれなく候。近き  
 内に宮嶋にまへること二候。  
 どうぞるす中からだ大事ニおんまち  
 下さるべく候。わたしハごく大丈夫  
 に御座候間、少シモあんじ下さる間  
 じく候。きんじよへよろしく  
 廿三日ヒル 代吉  
 母さま及  
 なをへ

▶ 明治二十八年二月十三日  
 出征の連絡  
 相田代吉から相田宅へ

義・斧二ハまいにち学校にまいり候  
 や。わたしおらずば、あまくなるだ  
 ろうから、よくよくおんころつけ  
 なさるべく候。  
 こめかみにてもかはりなきや、車の  
 たけ・おきんさん、其ほかしんるい  
 にはよろしくおんつたへ下さるべく  
 候。  
 廣嶋ハ見るものもこれなく候。近き  
 内に宮嶋にまへること二候。  
 どうぞるす中からだ大事ニおんまち  
 下さるべく候。わたしハごく大丈夫  
 に御座候間、少シモあんじ下さる間  
 じく候。きんじよへよろしく  
 廿三日ヒル 代吉  
 母さま及  
 なをへ

(宛名) 相田両家へ  
 (差出人) 相田代吉  
 明治廿八年三月五日

(文面)  
 拜啓 いよいよ明六日午前第九時ま  
 で二字品港へ参り、同所ヨリ金州丸  
 に乗り込み出帆の筈ニこれあり候。  
 実ニ愉快のことニござ候。  
 さて、出発の節ハ金円ご送付申すべ  
 くト存じ、ほとント十円ほどは貯へ  
 おき候ところ、戦争ニ必要の双眼鏡  
 相求メ代金六円、その他端書・切手・  
 煙草など三円ほど買入れ候二つ  
 き、ご送付仕らず候間、右様ご承知

相田代吉から相田両家へ  
 乗船を前に  
 明治二十八年三月五日

馬関(下関)港にて  
 三月五日 相田代吉  
 相田両家へ

(宛名) (ハガキ) 神奈川県足柄下郡早川町 相田本家行  
 (差出人) 馬関港・金州丸内 後歩一の八中隊 相田代吉  
 明治廿八年三月八日

(文面)  
 拜啓 宇品出帆、当地へ回航、今に  
 碇泊まかりあり候。今日までノとこ  
 ろニテハ、船暈(船酔い)など憂い  
 これなく、先ず大丈夫ニござ候。当  
 地ノ拔錨(はくま)何日ごろニヤ判然いたさ  
 ず候。しかシ、数日内ニハ佐世保方  
 面へ回航相なり候義ト信シ候。  
 右ハ無事起居ノご通知まで。  
 追ッテ、都合ニヨリテハ、書信稀レ  
 ニ相なるべく候間、ご了承相なるべ  
 く候。

▶ 明治二十八年三月五日  
 乗船を前に  
 相田代吉から相田両家へ

相田代吉から相田両家へ  
 乗船を前に  
 明治二十八年三月五日

馬関(下関)港にて  
 三月五日 相田代吉  
 相田両家へ

(宛名) (ハガキ) 神奈川県足柄下郡早川町 相田本家行  
 (差出人) 馬関港・金州丸内 後歩一の八中隊 相田代吉  
 明治廿八年三月八日

(文面)  
 拜啓 宇品出帆、当地へ回航、今に  
 碇泊まかりあり候。今日までノとこ  
 ろニテハ、船暈(船酔い)など憂い  
 これなく、先ず大丈夫ニござ候。当  
 地ノ拔錨(はくま)何日ごろニヤ判然いたさ  
 ず候。しかシ、数日内ニハ佐世保方  
 面へ回航相なり候義ト信シ候。  
 右ハ無事起居ノご通知まで。  
 追ッテ、都合ニヨリテハ、書信稀レ  
 ニ相なるべく候間、ご了承相なるべ  
 く候。

## 私の青春

④

## 菅沼 博

## 宇都宮陸軍飛行学校

宇都宮陸軍飛行学校は国鉄東北本の宇都宮駅から歩いて一時間三十分位の距離の所にあった。

東京陸軍少年飛行兵学校を卒業して引率されて駅に降り立ったが、一年前の少年飛行兵学校へ入校した時のように、トラックで出迎えてくれるという訳にはいかなかった。駅前で隊伍を組み宇都宮飛行学校まで歩いて行った。

駅前を左へ行き又左に曲がって東本線のガードをくぐった。後是一本道であった。暫く行くと大きな川があり、鉄橋が架かっていた。その川は鬼怒川であった。

この辺まで来ると左手前方の上空には赤トンボと当時呼ばれていた、だいたい色の複製の飛行機が飛び交わっているのが見え始めた。我々はその飛行機でまもなく訓練が開始されるとおもう、一時間以上の行軍の結果見えた飛行機の姿に歓声を上げた。

宇都宮陸軍飛行学校は今まで生活していた、少年飛行兵学校とは趣を変えていた。この学校は実戦部隊の中に存在する一つの単位の部隊であった。

我々が鬼怒川の鉄橋の上で見た飛

行機の乱舞は、先輩や他の部隊等の訓練、養成等であつて我々だけが訓練する飛行場ではなかった。即ち、色々の部隊が存在した一つの駐屯地であつた。

従つて、飛行学校に入ったからといって直ぐに飛行機に乗って訓練されるのではなかった。

午前中は航空に關係する学科が主であつた。少年飛行兵学校の午前中の学科は国語、地理、算数、歴史というように教養学科が主であつた。

ここでの学科は教養学科は無く、航空専門の学科が主であり、真剣に取り組まなければ同期生に置いてゆかれる状態であつた。

陸軍の少年飛行兵として入隊した我々は、最初の一年間は少年飛行兵学校で一般教養と一通りの歩兵としての訓練を受け、それを卒業してから、それぞれの適性に応じて専門の道に進むようになっていた。

当時は操縦に進むことは少年の憧れの的であつたが、幸運にも私はその操縦に選ばれた。

午後は毎日雨か強い風が無い限りグライダーで、滑空訓練を行った。

少年飛行兵学校では、注意力の集中ということを折りに触れて訓練された。しかし、この飛行学校では注意力の分散ということを強力に訓

練された。

今まで受けた学科、術科にはその都度、注意力の集中ということを訓練されて育てられて来た。それが全く反対の分散ということで訓練されるので、当初は戸惑い、慣れるまで本当に苦労した。

確かに空に上がった時、一点に注意力を集中していたのでは、何時敵が後ろからくるのか、天候は、計器は、僚機は等々、気配りに万全を期さなければならぬ。

しかも、その各々に深い洞察力が要求される。

本當の専門の道に入ると色々戸惑いがあるものである。

もう軍隊の生活を始めて一年以上が過ぎていたが、未だ我々の襟の階級章には、階級を示す星が付いていなかった。一期先輩の十六期生は昭和十九年十月に上等兵になつていった。

## グライダー訓練

昭和十九年秋、その頃私は東京陸軍少年飛行兵学校の一カ年間の課程を卒業し、操縦生徒として宇都宮陸軍飛行学校で毎日訓練に励んでいた。

学科は主として、気象学、流体力学、飛行場建設要領等の航空関係の勉強が主であり、当時少年であつた私にとっては生まれて初めて目、耳にする学科であつた。

学科の教官は区隊長が主となつて

教育を実施したが、今振り返つて当時の教育ぶりを回想すると、教官は教範の棒読み、又は黒板へ教範の丸写しが多かつたように思われる。

午後は術科が実施されるのだが、操縦生徒のためグライダー訓練が主で連日飛行場の片隅で、いつても広い飛行場のことなので訓練には十分な広さがあつた。

そこで初級滑空機による滑空訓練が行われた。

一機のグライダーに教官一人、生徒十七人がつき、滑空訓練をするわけであるが、十回〜十五回位までの搭乗訓練は興味もあり、今までの東京陸軍少年飛行兵学校の午後の執銃訓練に比較すると楽な毎日であつた。

しかし、秋から冬にかけては日が短いので十七人が一巡するには、相當の時間が必要であつた。

グライダーに一回搭乗するには十六回のゴム索を引つ張る作業を終えないと、順番が回つてこなかった。

ゴム索を引く者が十四人、翼端保持者一人、止索者一人、操縦者一人の合計十七人が一グループである。止索者とは、グライダーの一番後に長さ二米位のロープが付いていて、そのロープを地面に打ち込んだ杭に絡らませ、その端を確りと握りグライダーを動かないように保持する役目の者である。

とにかく、一回の搭乗が八分間としても一巡するのに二時間半は必要



である。

このため、一日一回の搭乗の日もあり、二回の日もあるという具合で、地上滑走を五、十回経験するには、半月もかかってしまふ始末で、さすが若い我々でも毎日の一回の搭乗のために十六回のゴム索の引張には嫌気が差して来た。

十回以上の回を重ねてくると、跳躍(ジャンプ)滑空をするようになるが、滑空の興味よりも腰を降ろして休みたいという気持の方が強くなるものである。

我々はなんとかサボル方法を考えるようになってきた。

訓練中に全員がサボル事が出来る筈はなく、教官は初めから終わりで、各人の行動を見守っているのので、十四人の一糸乱れぬ協力作戦が必要となってくる。

グライダーの初級機を滑空させるには、先が二本に別れた直径三十センチ位のゴム索を各々七人ずつで引くのである。

当初七人は各々向き合ってゴム索を握っているが、七歩下がれとか、十歩下がれとかの命令により、ゴム索の先端はV字型に別れる。

そしてその時の風向、風力により何歩までは地上滑走何歩まではジャンプ、それ以上は二、三米、五米、十米、十五米という具合に引く歩数により滑空高度が異なってくる。

この判断は教官が行ない、ゴム索の引張の歩数を決める命令を下す。

この難しい係数を教えられることなしに、いつとはなく体験的に我々は学んだ。

勿論、教官は具体的な数字を教えるてはくれない。しかしいつとはなしに回数を重ねるにしたがい、ゴム索を引けば引く程飛躍距離、高度はとも伸びる事は常識で理解出来た。

しかし、この風力、この歩数は何米の高度滑空ができるかという事は理解出来なかつた。

「目標前方の一本松」という具合に、七人の最後尾の者(一番グライダーに近い者)が、それぞれ号令をかける。最後尾の者は列の最先頭の者を見通して目標を定めるのである。

「三十歩引け」  
教官の号令がかかる。

我々は両腕に力を込め、腰を取られないよう一歩七十五糎の歩幅により目標に向かって掛け声を掛けながら引くのである。

掛け声は示された歩数を唱えながら引く。

「離せ」教官の鋭い号令とともに機尾の杭の所に位置している止索係がロープを離すと、機はスルスルと地上滑走をして、風力によっては二、三米の高度に滑空する。

各人の技りょうの程度により教官は歩数を加減していた。下手な者は歩数を少なく、上手な者は歩数を多くという具合である。

しかし、十回、二十回と搭乗回数

が多くなってくると皆一段と技りょうが上がり、全員が二、三米の高度、十、十五米位の飛躍距離を滑空するようになる。

これだけの高度の場合は機首を上下させる操縦かんの操作は必要としない。ただ、左右の傾斜の修正だけをおこなうことだけで十分である。

即ち、機首の上下の操作はこれからの教育により習得しなければならぬのである。そこが我々の狙い目であつた。

毎日の滑空訓練は広い飛行場で実施される。風の弱い日ばかりではない。又、歩数と風力とは微妙な関係がある。我々の企みは或る風の少々強い日を選んで行われた。

「三十五歩、引け」  
教官の気合いのかかつた号令に

我々は張り切つた。腹の底から出る掛け声を掛けながら目標に向かってゴム索を引いた。しかも一歩八十糎位で。その時の搭乗者は新井飛行兵であつた。

勿論、今日は午後の初めから張り切つてゴム索を引いており、新井飛行兵を除いて飛行兵全員は今日のこれからの内容を承知している。

教官は搭乗者に注意を向けている。いつも下手な新井飛行兵の練度を上げようとしていたので、我々の方に余り注意を向けていない。いつもより歩幅が広い事に気が付かないでいる。

「離せ」

教官の号令一下、止索係は機尾の止索をパツと離れた。

機はスルスルと動き始めた。

下手な新井飛行兵はちよつと動作が鈍い。

運動神経があまり発達していない飛行兵も中には紛れこむものである。

飛行前の滑空姿勢の修正の時、止索係は昇降舵を少々上舵に修正させていた事は勿論である。

飛行前には止索係は方向舵、昇降舵、補助翼の姿勢を点検し、搭乗者に対して正しい位置に修正させていた。

下手な新井飛行兵に対して、若干上舵の修正をさせた。

止索係は

「方向舵よし、補助翼よし、操縦かん若干引け、引き過ぎだ、若干戻せ」というように操縦者に対して、操縦かんを訓練に合わせた正しい位置にさせる。

このようにしてから、翼端保持者が「よし」と発声する。止索係も機体の姿勢、操縦者の状態を観察し、よろしいと判断した時「よし」と発声する。

このようにしてから教官は「離せ」と二、三十米離れた所から号令する。

教官の号令で止索を離れたグライダーは五米も地上を滑走したと思つた時、向かい風を受けて機体は機首を大きく上空へ向け真一文字に飛び

上がった。

「押せ」教官の号令が鋭くとんだ。

操縦かんを前方に押せという意味である。

しかし新井飛行兵には聞こえないらしい。そのまま高度約十二〜十五米位まで上昇した。

ここで初めて自分の今置かれていた状況がどの様であるか気が付いたのであろう。操縦かんを力一杯前に倒したのが見えた。

まだゴム索は機体から離れていない。

ゴム索が機体から離れるのと操縦桿（せんじゆうかん）を前方に倒したと同時に機首は、下に大きく弧を描いて向いた。

ゴム索が離れた後は教官の指示に従うだけである。

我々は離陸、滑空、着陸の基本的操縦理論は学科では教育されたが、まだ十〜十五回位の搭乗回数（たっしょうかいすう）の段階ではジャンプ程度の実技教育であった。

実際の空中飛行の方向舵、操縦かんの操作はこれからの段階であった。

大空十三〜四米位の高度にいて頼むのは滑空機だけの新井飛行兵。しかも運動神経の鈍い彼。高度十三〜四米の彼は吃驚仰天。何か叫び声（なげこゑ）が聞こえたようであるが、何を叫んだのかわからない。

教官は鋭く一言「引け」と号令した。

教官も少々吃驚したようである。

搭乗者が機敏に応じてくれると上手に着陸させる事が出来るのだが、中々号令の通りに直ちに応じてくれない。このため教官は「引け、引け」と、連続してメガホンで叫んだ。

下に向いていた機首、スピードを増した機は急角度で大地に向かつて突進したと思つた時、ぐいと操縦かんを引いたので機は大地を舐めるようにして一気に急上昇を始めたが、上昇を始めた機は上昇するにつれて機速が落ちた。

八、九米の高度に達したグライダーは空中に浮かんでいる風と同様の状態となつてしまった。

向かい風におおられ、機首を上空に向けた静止したままのグライダー。

「押せ、引け。押せ、引け」

連続した号令が教官から飛んだ。なんとか機は水平になるにはなつた。しかし、この時にはすでに機は完全に空中で静止の状態（じゆうじょう）で動いてはいなかった。

まだ教官は「押せ、押せ」「引け、引け」をメガホンで繰返し怒鳴つて

いる。教官も少々あわてている。我々はこの事のあるを初めから期待していた。

もしも上手な者が搭乗していたならば、これチャンスとばかりに上手な滑空をされてしまうに違いない。そのために、運動神経の少々鈍い

新井飛行兵を選んだのである。

機はゆっくりと水平に下落し始め、そのままの姿勢で大地に激突した。我々はこの十秒か十五秒の間、ゴム索を握つたまま始めから最後の激突の瞬間まで勝手な叫び声を挙げ

ていた。全ては予想の通り、主翼は垂れ下がり搭乗者は搭乗席で呆然自失の態である。

新井飛行兵は無事であった。駆け寄つた我々をびつくりした眼差しで眺めながらニヤツと笑つた。

自分の失敗をカバーする照れ笑いであつたのかもしれない。グライダーの主翼はピアノ線の飛行張線により支えられている。それが切断されてしまったのでその日の滑空訓練は中止になつたのは勿論である。

全員でグライダーを格納庫まで運搬したが、このグライダーは整備工場（じべいこう）で整備員によつて丸一日かかって整備され、明日は滑空訓練中止である事は他の事例もあつたのでわかつていた。

別に教官に叱られる事もなく、その日の課業終了はいつもの日より一時間も早かつた。

管内班に帰つた我々は、夕食前のノンビリした時間を管内の環境整備という名目の下に過ごした。

ノンビリした時間の話題は自然にこの事件に集中されたが、練度の上からない新井飛行兵を次の機会にも再度利用しようと話が決まつた。他

の内務班でも結構この方法で成功しているようであつた。

昭和十九年の年末までの短い期間ではあつたが、この方法で何回か滑空訓練を休むことが出来た。しかし、回を重ねるにつれて搭乗者の練度が向上してきたため、失敗に終わる事が多くなり、無駄な骨折りとなつてしまふ事が再三あつた。

練度が上がつてくれば、ゴム索をおもいっきり引つ張つて十分な高度、長い滑空距離を飛びたいのは誰も同じである。

新井飛行兵も痩せても枯れても天下の飛行兵である。そんな何時までも下手ではなかつたという事である。いつとはなしにこの企はやらなくなつてしまった。

先輩の十六期生は我々と異なり、グライダーも上級滑空機で訓練をしてきた。自動車で引張索を引き、高度は数十米の高度まで上げて滑空訓練（りくせん）をしていた。

今考えて見ると、上級滑空機で訓練をしなければ飛行機の操縦が出来ないか、と問われると、否と答えざるをえない。もうその当時はガソリンが不足し、訓練が遅れがちであつたのであろう。

初級滑空機により離陸はとにかく空中における機体の保持要領が会得できれば、すぐに赤トンボと当時言われていた複製機の初級練習機で、操縦訓練に入つてよい筈である。

それに先輩の十六期の飛行兵が入校後六カ月を過ぎてても、未だ卒業せずに在学しているという事も可笑しなことであった。

先輩の上級滑空機による八の字飛行を見ていると、早く我々も先輩のように上達したいと思つたものであった。

飛行機で滑空訓練をしていると色々の事が目に入った。最初に気が付いた事は、飛行機の事故が多いという事である。

戦闘機が着陸の際、着陸車輪が出

### 曾我小学校

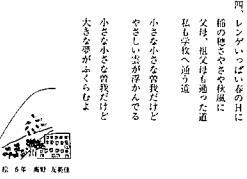
#### 開校一二〇周年記念音楽会

昨年12月、曾我小学校開校一二〇周年記念音楽会が開かれ、「小さな小さな曾我だけど」の題名の曾我小愛称歌が披露された。「この広い地球のかたすみ……」に始まる歌の作詩は、曾我小の六年生によるものだった。作曲は担任の青英権教諭が受持った。

児童を、作詞者とした担任の指導

小さな小さな曾我だけど

一、この広い地球のかたすみは、  
小さな小さな曾我がある。  
二、この広い地球のかたすみは、  
小さな小さな曾我がある。  
三、この広い地球のかたすみは、  
小さな小さな曾我がある。  
四、この広い地球のかたすみは、  
小さな小さな曾我がある。



ない事を何回か見た。また、こんな事もあった。

双発高等練習機が特幹、即ち、特別操縦幹部候補生の何人かを乗せて訓練に飛び上がろうとしていた。その時、幹部の数は搭乗前に我々の方を向いて放列をしいた。

搭乗前に用足しをする事は常識であるが、我々の目前で小便をした。広い飛行場のため、飛行場の隅までは二三百米ある。したがって、その高等練習機の横で用足しをしたのである。

もさることながら、我々小学校時代の「唱歌」の時間を比較すれば、格段進んだ内容である。

人と自然環境の關係の内容を盛り込んだ音楽会は、インターネットによつて、全国の小学校に発信された。或いは、海外の小学校でも受信したかもしれない。

同時に上曾我の「岩太郎川の歴史と自然」と、それに「子供たちの遊び」では、「市川一郎さんに何う」と題名で、「昔の遊び」がインターネットに乗った。

岩太郎川については、市川一郎さんは、「小田原史談」への掲載を、曾我小学校開校一二〇周年記念音楽会開催後のことにした。このことは、ささやかであるが、佳話として「小田原史談」No.一七九に掲載された。

飛行場の片隅でグライダー調整をしている我々に向いて元氣よくやっていたが、大きいのが、小さいのが、長いのと色とりどりであった。

彼等が乗り込み一層エンジン音が大きくなった。発進前のエンジン点検である。そして、点検を終わった高練機は滑走路の端の発進地点へと進み、まさに滑走を始めようとした時であった。

その時である。二式戦闘機、鐘馗が高等練習機の背後から着陸態勢に入ってきた。

戦闘機が着陸する時は、自分の前方は全然見えない。

特に二式戦はエンジンが大きく、翼面積も小さいので着陸速度は一式戦の隼よりも相当に早い。

当時の戦闘機は着陸するのに前方が見えないので、斜め前方を見ながら着陸する。

この二式戦が、これから離陸しようとしていた高等練習機の上に乗る様な形で着陸接触した。

接触した瞬間、黒煙と炎が立ち上がり、二式戦のエンジンは数百米の彼方にすつとんだ。

我々はグライダー訓練の手を休め、皆呆然と見ているばかりであった。

数分前、我々の目の前で談笑しながら恥ずかしげもなく、晒しながら小便をしていた特別幹部候補生の人達と二式戦の操縦者は、一瞬の内にあの世にすつ飛んでいってしまっ

た。

一夜明けた翌日は、黒の喪服を着た家族達が部隊の中を悲しげに歩いていた。

このような悲しい事故が宇都宮に在隊していた五カ月の間に幾つかあった。

悲しい思い出である。

宇都宮陸軍飛行学校で昭和十九年暮れた。一年前の東京陸軍少年飛行兵学校では、そんなに食事に不満はなかったが、ここでは食事の量が若干少ないようであった。

戦局が逼迫しているのが身にしみるように解ってきていた。年末の帰省は無かった。

大晦日の日に外出を許可されたので、戦友と連れだつて外出した。

その日は飯盒に若干のご飯を入れてもらい、山野に浩然の気を養うべく鬼怒川辺りを歩いていた。昼間になつたので近くに見えた農家に立ち寄り、飯盒の昼飯を食わせてもらい、お茶を御馳走になつたりした。

その老夫婦は親切にも焼き餅を勧めてくれた。我々は若い、そして食欲旺盛である。腹一杯に餅を詰め込みその農家を辞したが、あまりにも食べ過ぎて帰隊の途中竹やぶの日だまりで横になり、昼寝をしてしまった。

あの老夫婦の親切が今でも懐かしく思い出される。

(つづく)

# 酒匂史談 ③

かわせ はやお  
川瀬 速雄

## 二 酒匂のあけぼの

### 1 先住民(続)

平成十年(一九六八)、小田原市中里(元・大同毛織工場跡地)の第二次発掘調査(第一次は昭和27年、30年)が行われた際に、竪穴住居址、掘立柱建物址、貯蔵穴、墓などと考えられる集落跡が発掘された。それ等と共に、縄文土器、弥生土器に混じり瀬戸内海東部に見られる農耕土器、磨製土器類と、更に炭化した米が出土した。

集落跡の年代は、二千年前から二千五十年前のものとして推定されている。これは明らかに海より先人が渡来した証査であり、上陸地点は中里の南の酒匂川畔と見て間違いないであろう。酒匂小学校の校歌の一節に「酒匂の里は東路の柁とこそは知られけれ」と歌われているのも、我が郷土の地理を示すもので宣なるかなと思ふ。もつとも、辞典によると柁とは、開戸を開閉する軸、かなめ、中央の

役所とある。校歌は、酒匂の中世を考えてのことかも知れないが、原始時代のこともにも当てはまると言えようか。

### 2 相模国造り

相模国について国・郡がいつごろ置かれたか、伝えられた記録は皆無であるが、天武四年(六七五)十月十八日に相模国高倉(高座)郡の女人が三つ子の男子を生んだと『日本書紀』に出てくるのが文献上初めてである。

相模については、武蔵と一國をなしていたという説がある。はじめはムサの国が、サガミ・ムサシとなつたという説(加茂真淵)やサネサシのサシがもとで、サシの上はサガミとなり、サシの下はムサシとなつた(本居宣長)という説など知られているが、他にもいろいろの説がある。

ともかく、地名の語源の難しさがある。国・郡の制度は、ほぼ、大化の改新の詔(西六)で示

されたが、法令で明らかにされたのは、『大宝令』(七〇二)で、その全貌は明らかになつたとされる。

相模の国府の置かれた所は何処であるかについては、その場所が幾度かわつてゐるため議論が重ねられてゐる。

郷土史家内田盛雄氏によると、相模の国造りの所在地は、高田であろうとされる。以下は、内田盛雄氏の説である。

「條理制」を敷き、高田府より南の酒匂へ一條から五條の大路を作つた。

内田盛雄説には、昭和三十三年(一九五八)、この地を発掘調査した結論が重なり合う。すなわち、日大教授軽部博士を団長に郷土史家立木望隆氏、小田原市教育委員会社会教育課長中野敬次郎氏等が三回にわたり調査を行つた結果、高田が国府跡、千代廃寺が国分寺跡、別所薬師堂(焼薬師)が国分尼寺と断定された。

別堀、下堀、中里、鴨宮辺を府中と呼ぶのは、その名残である。また、舞台と呼ぶ小字名は、「條理制」の名残で、西酒匂富士見小学校付近と、国府津岡入口より十町程入つた所にあり、條理国分寺共に東大寺式と発表された。

郷土史に愛着ある我々にとっては、内田盛雄説は、非常に魅力有るもので、相模の国府は高田に置かれたが天災にて都市機能が不能になり廃止された、とするのは内田氏の推論と思われ

しかし、高田に国府が置かれたとは、現在定説に

なつてない。今後、文献上の証明が発見されれば別であるが……。

その点、文献的な証明がないが海老名国府説は、説得力がある。『新編相模国風土記稿』の江戸時代後期成立以来、多くの研究者によつて支持されている。それも、奈良時代に全国に建立を命じられた国分寺が海老名にあるからである。

また、九世紀の資料によつたとされる『和名類聚抄』(元言頃・延長八年頃成立)には、「国府は大住郡にあり」と記され、また十二世紀に作られた『伊呂波字類抄』には、相模国には「余綾 ユルキ 府」と文献的に残つてゐるので、研究者達によつて認められてゐる。

### 3 小総駅

大化二年(西六)正月、改新の詔勅に、「初脩京師置畿内内司郡司閭塞斥候防人駅場伝馬」とあり、駅制が公布されたが、実際には大宝二年(七〇二)、『大宝令』によつて設置された。

このうち、表題の小総の地名が出てくる『延喜式』(九一〇)と『和名類聚抄』(元三)〔略して『和名抄』〕から、

足柄郡の諸家駅家を挙げてみよう。

【延喜式】

坂本 二十二正  
小総、箕輪、浜田 各十二正

【和名抄】

上郡 高屋、桜井、岡本 伴部、坂本  
下郡 高田、和戸、飯田 垂水、足柄、小総

駅伝制は、古代国家の根幹を成すもので、その維持することはきわめて重要であった。駅家は、緊急を要する駅使のために駅馬、駅子の継ぎ立てや給食を行うとともに、駅使の休息・宿泊施設を持っていた。小総駅の駅馬は十二疋でその規模は小さく、堀建茅葺きの建物で、駅舎、倉庫、厩舎などの建物が一町歩ほどの敷地に配置されていたのではないかと、『小田原市史』通史編(原始・古代・中世)は記している。

ところで、小総駅はどこに有ったのであろうか。『新編相模国風土記稿』には、「今郡中遺名を伝えず」としながらも、『大和物語』を引用し、これは、郡中の駅家であることは論ずる必要はない。それは、今の酒

匂村の辺が残った跡と云うべきか、酒匂村の項を、併せてなお考えるべきである、と記す。

小総駅が出てくる『大和物語』とは、承平七年(三三七)完成の歌物語で、作者は不明。在原業平の二子在原滋春が東国下向を伝える条に「小総の駅といふところは海辺になむありける」と記されている。

また、『皇国地誌』酒匂村の項では、あまし次のように記している。

その昔より本郡高田郷に属し、成田の荘である。『和名抄』に本郡に駅家があり、『延喜式』に小総駅とあるとは、即ち当所のことであろう。この地が、東海道の宿駅であったことは、中世以来の書物にしばしば見いだせるからである。地理局編纂の「郡郷考」には、延喜式に載る小総駅は、いま高田郷小八幡の地を指すのであろうと記すが、小八幡は、駅家を置く地とは見えない。小八幡は酒匂の東に隣接するのでこの地

一帯を指したかもしれない。

平成八年(一九六六)小八幡八幡神社東(旧国鉄官舎跡地)で、やや規模の大きな開発があり、その折りの発掘調査で、平安時代の堅穴住居跡が確認された。或いは、小八幡東部かも知れないが、明治以降、小総の所在地は、いろいろ論議されており、この場所であると確定されていない。

吉田東吾先生は酒匂説、片岡永左衛門先生は下中村(小舟)説、長谷川英磨先生は前川(小八幡北方の前川飛地)説、中村梅吉先生と石野瑛先生は国府津説、とまちまちである。

内田盛雄氏は、大昔の街道で酒匂川を渡った新田の土手に石仏を祀った小施小屋があり、和銅六年(七三三)好字の詔で、小施を小総に変えたのではないかと解されている。

以上のように、小総駅について、見解がいろいろとわかれており、上掲の『小田原市史』では、その所在については、分からないとされている。

典』では「小総。延喜兵部省式に見える。相模国の駅名、麻の生産地という説。自然地名とすれば、小(フサ)は接頭語、総(フサ)は塞ぐと関係し、山などに囲まれた地をいふ」とある。

そこで、私は酒匂説を取りたい。その理由は小総の駅は浜辺であるという。酒匂は、明治まで綿花の栽培が盛んであった。温暖な平坦な地なので麻の生育もよかつたであろう。下中村国府津(小田原市)は、「山などに囲まれた地」とは思えず、酒匂、前川飛地ならば、東は国府津山、北は曾我山、松田山、西は箱根連山と、まさに山に囲まれている。

『清少納言草紙』の「をぶさの市」とは、宿場を示すもので、酒匂に字市場があり白山社が祀られており、付近より縄文・弥生式土器片や古墓石の部分石が多数出土している。

高田より国府津に至る道筋「巡礼街道」(日立く森戸川)は、湿地帯だったようで、浅見造園の植木畑を試掘させていたのだとあり、地下1.6メートル付近は、褐鉄鉱層で高師小僧(湖沼や湿地に住むバクテリアが水

中に溶けて鉄分を酸化し木や草の根の表面に積み重なって出来る物)が出土する。小総駅家の所在は、このような物が出来るような土地ではなかつたであろう。

3 郷名

『新編相模国風土記稿』を見ると、酒匂の村名の由来は、ハッキリしないと記しながら、二、三の説を紹介している。

- ①神酒説 日本武命東征の時、龍神へ祈り誓い今の酒匂川へ神酒を灌いだので、酒の匂い(酒)がしづらくの間続いたので、遂に地名になった。しかし、これは、全く匂の字を匂の字に誤って、憶測を加えたものである。
- ②川水逆流説 東海道側の民家の前に、幅三尺ばかりの溝があり、この水が西へ逆流する故地名となった。これも信憑性がない。

(続)

## 没後一千年を迎えて

本年は、西暦二〇〇〇年であります。二千年を迎えて、世界の国々から、地球は一つですね、と云うメッセージをいただいたような、そのような気持ちの新春でした。この記念すべき平成十二年は、平安時代の相模権守でありました、源重之公の没後一千年を迎える年でもあります。

この年を迎えてみて、今まで幾度か掲載の源重之公の拙文の中で、気掛かりとなる箇所があります。

それは、『小田原史談』No. 一七七に「相模権守 源重之」と題して記した18ページ目の次の文です。

『歴史伝説でみる惟喬と惟仁の互いの従者による相剋は、物語通りでしょうが、即位なされた清和天皇も、後には嫡子「陽成天皇」が廃帝とせられて、清和帝嫡流の即位は御二代で終止符を打ちます』

小田原市早川地区に残る惟喬伝説を背景にして、相模の歴史に清和源氏重之の祖述に影響する語りとして述べさせて頂きましたが、付帯のつもりでした。

重之の祖父・貞元親王の兄弟である陽成天皇から光孝天皇への継承の経緯や、御委譲後の御歴代朝廷との関わりは、重之の生涯を象形する事であると考え、そのように表現させていただきましたが、筆足らずでした。

そこで、歴史学者目崎徳

## (一) 光孝天皇の御事蹟について

## 一品時康親王の経歴

ここに光孝天皇千百年祭に当り、その御事蹟の概要を申し上げます。

光孝天皇は御在位の年号に因んで「仁和の帝」、また、山陵の地に因んで「小松の帝」などの御名もあります

## 歌人 源重之 庄一 日下部



衛先生の論述を部分的に引用させて頂きたいと思えます。

目崎徳衛先生は、昭和六十二年九月十八日、天皇陛下に約四十分間御進講申し上げました。

その内容は、次の通りです。『聖心女子大学論叢』昭和62年12月刊。

君がため春の野に出でて  
若菜摘む

わが衣手に雪は降りつつ

の御製によってであります。百人一首には天智天皇をはじめ御製八首がありますが、中でもこの「君がため」の一首の、ゆたかな人間性の表現と、清らかにしてのびやかな調べは、国民的愛唱歌と申し上げても過言ではあるまいと存じます。

元来この御製は、『古今集』巻一に、

仁和の帝、親王におま

しましける時に、人に

若菜たまひける御うた

という詞書を以つてみえるもので、すなはち天皇が即位される以前の作でありました。光孝天皇の即位されたのは五十五歳、当時の通念では老境に入られてから

で、しかも五十八歳で崩御されますので、治世はわずかに三年半に過ぎません。

したがって生涯の大部分を親王として送られましたので、政治上の御事蹟はほとんど申し上げるべきものはありません。しかし、その

人格と才能については、正史『日本三代実録』に、

「天皇少くして聰明、好み

て経史を読む。容止閑雅、謙恭和潤、慈仁寛曠、九族を親愛す。性、風流多く、尤も人事に長ず」と称えられたとおりで、学問を好み風流を愛された、この非凡の資質は、文化の上に注目すべき貢献をされました。

この点は後にくわしく申し上げます。

天皇の父仁明天皇は、嵯峨天皇の皇子であります。嵯峨天皇の皇子・淳和・仁明三天皇の弘仁・天長・承和の三十年間は、古代史に比べるものを見ない太平の時期でありました。日本歴史を通じて、鎖国の江戸時代を暫く措けば、戦後四十余年の平和に次ぐ安定であります。この間に嵯峨天皇を中心として宮廷の文化は華やかに開花いたしました。時康親王はこの間に生を享けられ、十六歳の時、清涼殿の仁明天皇御前において元服されました。次いで四品の位を授けられ、累進して元慶六年(八二)五十三歳の時、一品に昇進されました。この間に、中務卿、式部卿、大宰帥、常陸・上野の太守など、親王の任ぜられるべき官職を歴任されました。殊に一品親王の礼

遇は太政大臣と同格でありますから、時康親王は皇族の筆頭として、朝廷に重きをなされるに至ったのであります。

(二) 皇位継承の経緯

時康親王が一品に昇叙されたのは、元慶八年二月四日、陽成天皇が病氣を理由として突如退位されるといふ非常事態が起こり、その際群臣の総意による推戴を受けられたためであります。

陽成天皇の退位の事情は、『三代実録』に、「禁省の事秘にして、外人これを知らざること無し」と記され、まして後世からはみだりに測り知ることはできませんが、ある歴史家は、太政大臣藤原基経のひきいる政府と、基経の妹に当る陽成天皇の生母、藤原高子皇太后のひきいる宮中との対立が激化した事を、根本原因と推定しております。従うべきかと思われま。

この際、時康親王が多くの皇族の中から推戴されたのは、第一に皇族の筆頭たる一品親王の地位におられたこと、第二に基経が早くから時康親王の人格に深い

敬意を抱いていたことによるものと考えられます。たとえば、『大鏡』に、次のような逸話が見えております。

基経の父良房の催した大饗に、給仕人が粗忽にも主賓にさし出す御馳走を取り落し、あわてて時康親王の御前の物を取って主賓の前に据えました。その時、親王はただちに御前の燈火をかき消し、失態が一同の眼にふれるのを防いでやられました。末席で見ていた若き日の基経は親王のふるま

いの見事さに感嘆したというのであります。基経はその母が親王の生母の沢子姉妹であります。こうした血縁の親しみだけでなく、親王のすぐれた人格・才能を知悉していたわけであり

ます。かくして群臣は神器を奉じて時康親王の宮に参上しましたが、親王は容易に請いを容れられず、一同はついに夜を徹して懇願を続けました。翌二月五日、基経が参上しましたが、彼はすでに先帝より賜わった劔を腰からはずしておりました。これを見て時康親王の兄弟に当る兵部卿本康親王

や嵯峨天皇の皇子である左大臣源融ら、いずれも皇位継承の資格ありと自負する人びとは驚いてこれに倣い、三名は時康親王から帯劔を賜りました。ここに親王は意を決して推戴を受けられ、東宮に入れられたのは、二月二十三日であります。

(五) むすび

以上申し上げた事を要約いたしますと、光孝天皇の御在位は短期間で、政治上の御事蹟は多しといえませんが、後世の日本文化の規範となった王朝の和風文化の源を開かれた、その文化上の御事蹟は、きわめて大きな意義をもつと申し上げねばなりません。

北畠親房は『神皇正統記』に、「光孝ヨリ上ツカタハ一向上古也。ヨロヅノ例ヲ勸フルモ、仁和ヨリ下ツカタヲゾ申ス」と記しました。これは光孝天皇より以前は古き昔であるとして一線を画し、光孝天皇の仁和以後を四百年後の彼自身の時代においても、朝儀万般の先例として尊重すべきこ

とを指摘したのであります。親房はその理由について、「上ハ光孝ノ御事蹟は、天照大神ノ正統トサダマリ、下ハ昭宣公(基経)ノ子孫、天兒屋ノ命ノ嫡流トナリ給ヘリ」として、皇位の正統と撰政・関白が輔弼に当る体制がここに定まったこと

を挙げておりますが、現代においてはさらに視野を広げて、朝廷の儀式や文化全体が仁和以後面目を一新し、やがてその伝統が武家や庶民にまで広く深く浸透し、わが民族文化の中核となつた点を注目すべきであろうと存じます。

年中行事・和歌は申すまでもなく、絵画・建築・作庭・書道・音楽・服飾その他、文化領域全般にわたって、平安時代の宮廷を中心として、いわゆる和風の文化が創り出されました。そして、この和風文化こそ、固有の文字たる仮名の出現に象徴されるように、わが民族文化の創始でありまして、しかもその後一千年間にわたって各時代の文化の「古典」となったものであります。今後この点の再評価が

さらに進展いたしますならば、その出発点に位置される光孝天皇の御事蹟は、一段と重みを加えるであろうと考えられます。

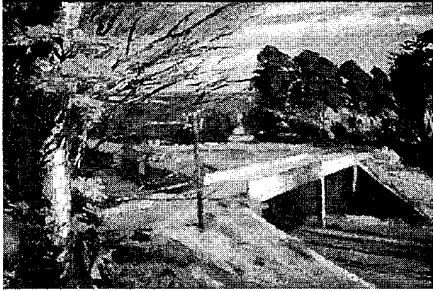
ここに光孝天皇を偲びまして、御事蹟の一端を申し上げます。

註(30)

王朝の宮廷を中心として創造された和風文化が、中世、近世を通じて諸階層の生活と文化に強い影響力を保持した事実は、今日いじめるしく閑却ないしは軽視されていると思う。それは明治・大正以後における「古事記」「万葉集」と飛鳥・天平文化の国民的人気に比較すれば、まことに対照的である。

『古事記』『万葉集』がそれ自身すぐれた古典であることはいうまでもない。せよ、これらが平安時代以後ほとんど忘却され、後世の文化に影響を与えることなく埋没していたことも、歴史的事実として直視せざるを得ない。しかるに、これを再発見した近世の国学は、王朝文化を継承した中世歌学を批判し克服するこ

湯川治郎画伯回顧展



期間 平成12年3月29日(水)
~4月3日(月)
10時より6時
最終日は5時まで
主催 伊勢治書店
場所 同店3F ギャラリー
「新九郎」

平成3年5月、遺作展がツノダ画廊に於いて開かれたが、再度、作品展をと要望もあり、この度、回顧展が上記により開催されることになった。
出品作品には、年配者にとっては、懐かしい思い出の多い県立小田原中学校の「檜林」。通称「青橋」は、まだそれがコンクリート製で白かった時代で、湯川氏が、小田原中学校に赴任して間もない大正12年5月、28歳のとき描いたもので、記念すべき作品となっている。

湯川治郎画伯略歴

- 明治28年 広島県沼隈郡赤坂村(現福山市赤坂町)に生れる
大正4年 東京美術学校西洋画科入学
大正8年 第一回帝国美術院展覧会に入選
大正9年 東京美術学校西洋画科卒業
大正12年 神奈川県立小田原中学校教諭
昭和27年 神奈川県立小田原高等学校退職
小田原市図書館協議会委員・小田原市文化財保護委員・西相美術協会会長を歴任
平成元年 没 94歳

とを学問的出发点としたために、いきおい親房のいわゆる「上古」のみを極度に尊重する尚古主義に傾いた。そして、その思想に基づいて、維新政府は「復古」の目標を伝統的な「延喜天曆の聖代」から突如「神武創業の昔」に切り替えた。ここに実現された国是が、『大日本帝国憲法』の示すごとく、戦前の国家体制の原理として定着したことは、申すまでもない。『有職故実』の学問的衰微や『古今集』の価値喪失などは、こうした潮流に圧倒された結果であろう。
したがって、王朝の和風文化を、その近代に至るまでの永く深い影響を視野に

入れて再検討することは、戦後における日本文化論の不可欠の課題であったはずである。戦後四十年にして、この課題への取り組みは遅ればせながら緒に付いたといふべきであろうか、あるいはなお市民権を得ていないといふべきであろうか。ともあれ、これは皇室論、象徴天皇制論としても重要な論点であろう。以上の見解は、先に小著『百人一首の試み』でも述べたが、この度光孝天皇の御事蹟を申し述べるに当って、ひそかに考察の基礎と力点をそこに置いたことを補説しておく。

(付記) 本稿は、昭和六十二年九月十八日、皇居の宮殿竹の間において、天皇陛下に御進講申し上げた際の草稿に、補註を加えたものである。立ち入った考証を行ったわけではないけれども、王朝文化の歴史的意義と光孝天皇の文化史上の地位に関する私見(補註30を参照されたい)には、学界の批判を得たいところがあるので、ここに公表した次第である。

以上が、目崎徳衛先生の御進講内容の概略です。今後も、源重之公の事蹟に、関心を持ち続けて行きたいと思っております。
◎小田原のダイヤ街で、平塚資本の靴店が倒れた後に貴金属店が開業したが、これもまた倒産。その跡に昨年七月二日、ドラックストアがオープンした。向かい合いに同業者が営業してるところに殴り込みをかけた。凄いや競争と思いきや、それは、広告により同じ資本系列であるのが分かった。それにして、目と鼻の先で系列同志競わせるとは……。死闘を繰り返させる壮絶な時代に入ったものだ。一人合点したが、そうではなかった。ある人曰く「もし他の資本の同業者が入ったら困



るので防衛上入ったのだ」と。◎昨年の暮れ、御幸の浜の突堤に、クリスマスツリーの灯がともるといふことで、カメラを持って出掛けた。驚いたことに、浜がすっかり後退しているではないか。丹沢湖ダムの建設により水の恩恵を受けている都市がある一方、小田原で浜の後退のように被害を被っている地域がある。日本のような狭い国では、一方よければ、他方が悪くなり儘ならない。小田原の浜の後退は、昨今の地球温暖化の影響を受け、海面の上昇によるものと思えないが、それにしても昨年、御幸の浜の大松明の行事は、大気汚染防止のため中止されたと聞くが。



# 農具が語る 生活史

## 「す」「混ぜ棒」

小野 薫

写真は、自家製醤油を作った時代、昭和初期までの名残りの簀である。当時それが使用されていた手順を簡単に記する。

大豆を少々硬めに大釜で煮、それに小麦の炒ったものを、半分は石臼で荒挽し、残る半分は丸まま、大豆と混ぜ合わせ、四〜五センチ



倉前に吊された簀

の厚さに麴箱(深さ六〜七cm、三十cm×cm)に入れ、積み重ねて、これに蕨を何枚も被せて、其の間温度調整をしながら、何回か手を入れ、縦・横の麴の山を作る。場合に依っては箱を切り斜に色色とするのである。これを麴を寝せると言うが、約三日もすれば発酵

し花が来たと言う。出来上がった麴は上下混ぜ合わせて七〜八日間ぐらい陰干しにして置くと均一な青麴が出来上がる。麴を醤油桶に入れ、水と塩を麴の量に応じて混入して醤油を仕込むのである。こうして仕込んで約三カ月もすると醤油が出来る。その間、毎日朝夕の二回(以上)、桶の中の麴を混ぜ

合わせるのである。この時使用されるのが混ぜ棒である。竹に板の自家製の簡単なものだが、麴を上・下する為には必要欠くべからざるものである。

最初は水に麴がなれないので大変な作業である。この家によ

り、桶の大きさも、期間も違う。一年もの二年ものになると色も香りも最高になるのだが、古い時代には、もっと期間を短縮して使用したのである。こうして出来上がった醤油の元を「もろみ」と言い、保存用の樽に詰めるまでに使用するもの、醤油を汲取る時に使うものが簀(す)である。「す」を大別すると、底が付いたものと、底の付いていないものがある。いずれにしても竹製の円筒形のものであるが、目が細かい程良いのである。底のあるものは浮き上がるので桶

### 一句鑑賞

芽柳の息吹き見えたよ双眼鏡

内田 清

小田原市文化財保護委員として、また、西相模歴史研究会を継承し、地域の歴史の掘り起こしをしている作者。俳句にも意欲的な努力が見られる。

若い柳の枝が早春の風にゆらゆら靡いている様は、自然と春の景をなすものである。作者はその風景を遠くより眺めていたのであろう。柳の枝が双眼鏡のレンズより、まるで息吹きが伝わってくるように見えたのである。

早春の明るい情景がそこはかとなく感じとれる句である。(剣持芳枝)

の中に押し込んで置くのに、は重しをして置かなければならないが、底のない方は、そのま、桶に押し込む事が出来、比較的簡単だが要領よく固定しないと、底の方から「す」の中に不純物が混入し易く注意が必要である。

ある程度たったら、「す」ににじみ出た醤油を三、四日で汲取り、大釜で一日程沸かし、上部に浮いてくる不純物(あく)を取り除いてから、熱湯を通した、貯蔵用の樽か、「かめ」に入れて保存する。これが一番搾りの醤油である。

その後、仕込み桶の中に「スメ」を入ると言って、餅米を少しやわらか目に煮たものを、桶の中に入れ、水と塩を追加して、同じような方法で、「す」より汲取り加工する。二番とは二回目、三回目分は三番醤油と言う。

醤油の汲み取り粕は布で更に搾り、粕は、牛馬の飼料として使われ、田圃の肥料ともされた。混ぜ棒は竹の長さ板の大きさは色々で、古い倉前や納屋の隅に今でも眠っているかもしれない。

# 酒匂上輩寺三十四世桜沢堂山の研究(二)

## 谷口得二

小田原市酒匂<sup>さか</sup>在住、川瀬家所蔵の

書画資料のうち大軸(蓬萊山図)に「明治二十八年七十五老狂」の落款があり、また六曲屏風(富士眺望興津之図)に「明治廿五年 十二月一日、酒匂上輩寺主七十二、主道士桜沢茶翁即需画」と年齢が記入されている。この堂山の自筆落款は戸籍の生年より逆算して、二年の差があることが確認され、位牌年齢とは完全に一致している。されば何れを正とするか、あらためて問題が提起されてきたのであるが、彼の老年期の記憶と、壮年期の覚えによる戸籍届出との二点について想定するに、あきらかに壮年期の覚えの方が確実性が高いとみてよいのではなからうか、老いるに従って何時しか錯覚を来たし、落款年齢でそのまゝ、過ごしてきたものと考えられる。

文政六年(一八三三)生れを文政四年の生れと錯覚することはまず考えられない。堂山自身の年齢の錯覚が、そのまゝに逆算され伝承し、河竹調書の記録となったことは真実に近いものと明言してよいのではないか。戸籍に記載されている通り、堂山は明治四十年(一八六七)三月の入寂故に、生年月は文政六年十月で数え年八十五歳歿となる。

また、もう一つの記録として、淫水亭開好側からの会本料として、それがどれ程信憑性があるか疑問ではあるが、「通運堪鹿軍談」第十二編の序文に彼の年齢が記されている。これは、すでに林美一「恋川笑山」(愛書家くらぶ・第八号(昭和四十三年発行))で、指摘されているが、この文久二戊年(一八三三)春の序年記とともに、次の記述がある。

……小子淫水亭。当年つもつて三十八歳。本性ならば今頃は。人にも知られん年記なるに。…

この年齢で生年月日を逆算してみると、文政八年生

れとなる。前記の戸籍記載の生年との差を考えても、こゝまた、二年のずれが生じている。会本故に一蹴することもできるが、それでもこれを一応汲んで考究してみるならば、老年期に於ける錯覚年齢のことから、また若年期においても、定かに知覚していなかった己の年齢と生年を指摘することができる。右に挙げた三種三様の資料記載の年齢は、始めから生年月日を正確に把握していなかったものとみられるのである。

必要にせまられ定簿簿作製時に、熟考の上、書きとめたが、老境に入ったもの、特有の覚え違いをしたものと考えざるを得ないのである。

さらに、この堂山の戸籍から窺える事は、その他にまだ数多くある。堂山のこの戸籍届出が、明治七年(一八七四)の布告によって、彼自ら適当に書きこんで提出したものかどうかの問題もある。彼にしても、もとより積極的に不実を記載する要もないと思われるから、この戸籍も当時の有力者が関わって作製したものとして理解する限り、それ程、出鱈目に記入したのもとも思われない。彼の定簿と、それ以後の転移については、後稿に詳説することにした。

この小田原市酒匂にのこる戸籍面から、先ず両親を取り上げ、最初に母親の消息から追究することにしよ。戸籍記録に(母 不詳)とあるが、堂山は、明治七年の時点、母の名を忘失していたのか、それとも、早く

から母を失って、初めから記憶の中になかったのか、この何れかであった。しかしこの(不詳)の記入については、おおいに、不審に思われる資料がある。刊行年は不明であるが、江戸後期の板行と推考される彼の会本『玉廻門名所物語』・初篇の序文に、あきらかに母を恋い、その母の名を記した次のような贅辞を揚げた文をみることが出来る。

### 『玉廻門名所物語』序

父母在時は遠く遊ばずと。予おさなき時より文見ることを好みて、母の許を離れず。母は黒川氏にして名を多喜と号。少く風流の志ありて、俳諧の発句をまねび。亦たはれ哥を口ずさびて心のたのしみをしつ。いつの頃よりか持伝へけん。六百番名所がるたといふ物。予に給ひしが。最珍らしきものなれば。秘蔵して常に出さず。唯弥生雛祭に而已段に飾りて。其折柄に見ることとしてありけるが、星移年かはりて。今は是を見る毎に過し母に对面心地になんありける。然るに近頃書肆の需によりて。間々春画に筆を染。剩春情艶史の戯作にたはけの限を尽すも。其需頻にして辞がたきが故ぞかし。扱も何時迄斯であるべきと。此頃俄に思ひ起して。頓て春画に筆採まじく思ふより。日頃心にた、み置たる。此名所物語に名残近きされ筆を立染ぬ。されば長閑なる日。



南窓の机上に向ひ。彼是思廻らすに名所の数々多ければ。何れよりや画出んと心決せずありけるに。忽母の給物なる、名所が「多」を思ひ出しは。是吾がためのさしにもやと。重しま、におつとつて。上より明で出るが俣。是を枝折にかき出せば。もとよりゆくてのじゆんをなさず。壺の碑明石瀉。吉野の桜。更科の月。打交たる名所々々を。一目に見るは実にも又。詠にあかぬ思ひなれば。人もさこそ思ふらめと。心に問。心にさだめ。世の嘲哂をも顧みず。拙き筆を爰にたてぬ。

この資料からは母方の家は黒川なる姓を江戸期において、既に持っていたことよりして、先ず士分の家系か、それとも相当な身分の出とみてよいのではなからうか。

しかもそれを裏付ける資料として、彼の会本『快淫水好伝』初篇の序文も次に引用することにしよう。

書屋淫勢堂。予に水滸の世界を会本に綴てよと乞。此時心中忽然として昔を慕。予が母方の爺。八丁堀の根生にて。性酒をたしなみて放蕩の冠たり。花街戯場に浮れ遊びて戯号を酒とよばれしが。予おさなき頃。はや年老て。ますます酒気のはなる、事なく。曾小説を好。日々水滸伝を読んで。予に聞するを樂とす。是小説の聞きはじめ

にして。おさなき心に。いともしろしと聞しより。今に至て水滸の如き興ある書はあらじと思へり。……………(後略)

ひつじのはる 淫水亭(三ツ玉印)  
(源氏香胡蝶園)

この序文中では彼の母の父とみられる、彼の祖父が、八丁堀の士分として理解されるような書き方をしてゐるが、何故にこの様な明瞭な記憶がありながら、戸籍には母の名を挙げて届出なかつたのか。不審と云えば全く不可解である。それとも、これら会本序文の記録を全く虚構のものとして切捨てるべきなのか。或は亦、淫水亭と種清とは、全く別人であつたのではないかという疑義さえ湧いてくるのである。しかし、今は、これらの問題を越えて、この二点の会本序文より受けとられる感触は、充分にその真実性が汲みとられるし、また一面、反証がない以上、やはり、これを受け容れざるを得ないであろう。

このように推考すると、問題は、母方の祖父から聞かされた水滸伝の話を覚えてゐる位である以上は、恐らく母生存中の祖父との交わりとも思えるし、されば母との死別も恐らく種清が少年期になつてからとみるべきだし、また彼が、(六百番所名所(後年迄持ち続けていたという事は、どのように思考をめぐらしてみても、高山、越後、江戸と長

い旅を経て来たことを否定する考察方向を示している)と云えるのではなからうか。

このように考えを進めてみると、黙阿弥を通じて伝えられたと思われる河竹繁俊氏の種清に関する幼少期の記録は、他資料と全く妥協調和し難い事柄となつて提示されて来る。

「河竹調書」の聞き書部分、即黙阿弥自身の直接見知らない種清の幼少期の周辺について、いまま少批判し、追及を加えてみたい。

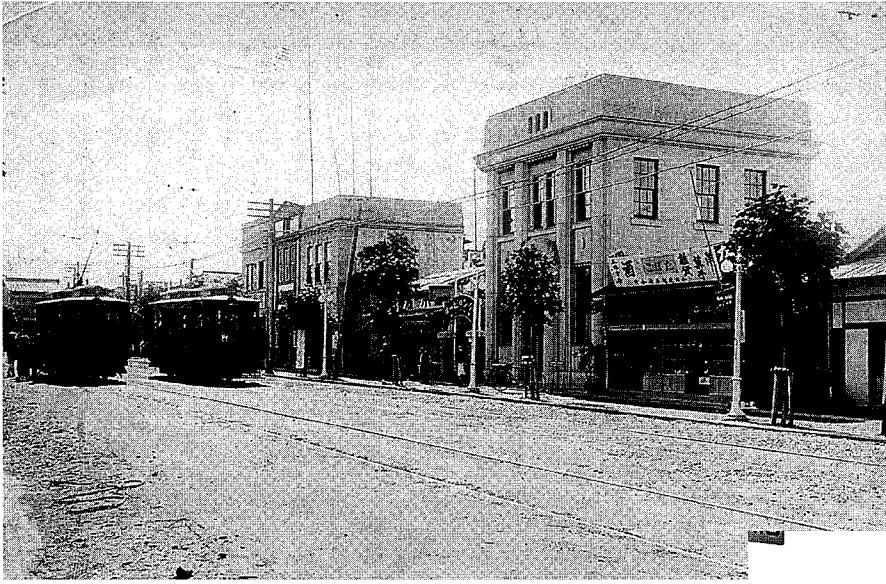
先ず論究の順序として、「越後から遊行上人に伴はれて江戸に來り……………」の記載のある所をとり上げてみよう。ここに指摘されている遊行上人が、果して真実、越後の地に巡錫し、種清を江戸に連行したか、どうかの問題については、(時宗)の制度を或る程度知つておく必要がある。よつてその概略を時宗資料から左記す。

「宗祖證誠大師一遍上人智真円照大和尚が建治元年(二三五)十二月十五日、本宗を開いて後、所謂時宗十二派がこの教統を承けて、中世非常に隆盛を極めたが、正中二年(三

対して主導権を確立して今日に至つてゐる。この諸国を巡錫する遊行上人の内、誰がこの種清に邂逅したかである。これについて、「遊行藤沢河御歴代系譜」(書写者天竺隆元 昭和廿九年一月刊)をみると、この時代の遊行上人は、傾心上人以外該当する者はいないので、この上人の記録を挙げてみる。

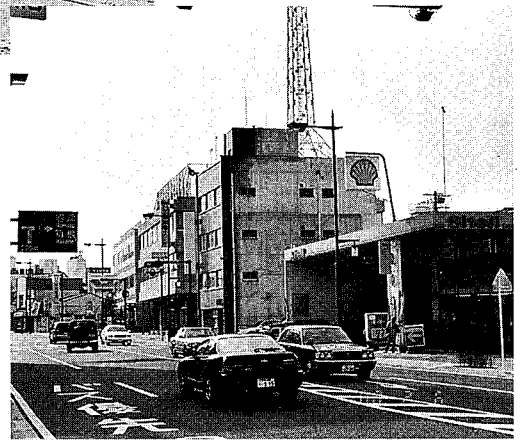
遊行五六代・藤沢三七世 傾心上人 蓮寺四八世 入戒不祥、生国ハ盤城白河、人皇百二十五代仁孝天皇即位五年、文政四辛巳年三月三日藤沢二入りに山四年後遊行相續賦算、同七年甲申ヨリ西国ヲ巡化スルコト五年、文政十一年戊子年八月藤沢二飯り休息スルコト六年、天保四癸巳年三月宇賀神祠再宮二付銀子拝領、右御礼ノ為メ參府、ソレヨリ関東奥羽ヲ巡化スルコト三年、同六乙未年九月二十日、越後高田、称念寺ニテ、七十歳入滅、

入寂二付役僧洞雲院江戸へ出府、十月一日、寺社御奉行堀田備中守殿江届出、先例ノ如ク存生中頂戴ノ御朱印伝馬ヲ以テ藤沢迄遺骨荷物等引取ノ儀願立ノ処御開届ニテ十二月十四日、藤沢へ着、同十六日御奉行堀田備中守殿へ入骨届ノ事、……………(後略)



# 写真 今昔 真

写真の左の建物（現在東電の北半分）は、日本電力(株)横浜出張所小田原営業所（現・東京電力(株)神奈川支店小田原営業所）。小田原電気鉄道(株)の電車が二台交換する場所は、日電前しかない。新築されたのは、昭和5年のこと。大正11年（1922）小田原電鉄の火災で焼失、元軽便鉄道の早川口の駅舎から移転した。当時、ラジオを聴くにはアンテナが必要で、屋上の4本の支柱は、2本が対で、その間に張られた二組のアンテナは、一階と二階に置かれた2台のラジオにそれぞれ受信された。アンテナが不要になったのは、建物の新設から7、8年経った昭和13～14年頃のことである。一般では、アンテナの支柱に竹を使用した。（東京電力OB市川一郎氏談・聞き手岡部忠夫）



## 浜町方面を望む

（青物町シーサイドマンション9Fより）



# 丹沢の植物

④3

城川四郎きがわしろう

ホトトギスという名の植物がある。その花弁の紫色の斑点を、ホトトギスという鳥の胸の斑点になぞらえてその名がある。山の花に親しむ人たちにはよく知られている。ホトトギスには、たくさん仲間があるが、花の色が黄色の系統と紫の系統の二つに大きく分けることができる。黄色の系統の一種サガミジョウロウホトトギスは日本中で丹沢だけしか分布しない。だから丹沢の植物について語るときは先ず一番に話題にすることが多い。このシリーズ

でも真つ先にとりあげたのを覚えておられるだろうか。紫の系統の種類で、近年庭先などでよく目にするタイワンホトトギスは台湾産で、園芸品として日本に持ち込まれたが、とても丈夫で繁殖力が旺盛なため野生化ははじめているようである。いろいろなホトトギス類のうち今日ご紹介するのは黄色の系統の一種タマガワホトトギスである。北海道から九州までの広い範囲に分布するが、ブナ帯というやや涼しい地域の林床に生えるので低い丘陵など

ではお目にかかれない。個体数はあまり多くないのでも分布域を歩きさえすれば必ず出会えるというわけにはいかないが、きわめて珍しいというほどでもない。神奈川県では丹沢の尾根に見られるが箱根には記録がない。なかなか気品のある風情をもった植物なので心ない山草マニアの標的にされることもある。

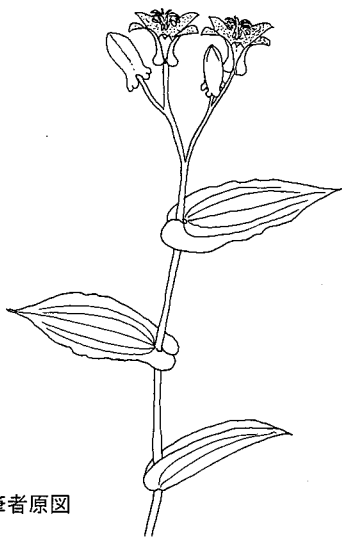
山で出会うとうれしくて、ヤー無事でいてくれたかと声をかけたくなる。

夏、茎の頂部に花を着ける。花は黄色で、六枚の花びらがあり、外側の三枚の基部は丸く球状になっている。花びらの内面には紫色の斑点がある。葉は基部が深く茎を抱いて、両面ほとんど毛がない。

タマガワホトトギスの名の由来は、花の黄色が山吹色であり、山吹の古い名所は京都の玉川が有名なのでそのタマガワの文字で黄色であることを表現したという。

(神奈川県植物誌調査会代表)

タマガワホトトギス (ゆり科)  
*Tricyrtis latifolia*



筆者原図



古文書講座 30

足柄の築城石を読む

加藤肥後守・松平土佐守を巡って

内田 清

加藤肥後守の刻銘石

今回は拓本五点を基に足柄の築城石の謎について略述してみたい。

写真1の甲は、小野薫氏らに案内された伝承石「大石小石」の北面から採拓した。久野上柳河原にある。彫りは浅いが次のように読める。

「加藤肥後守

石場」

写真1乙は、昨年十月「広報小田原」に掲載された石垣山一夜城本丸登り道の石から採って逆さにした。拓本と石灰詰めなどで読む。

A「此石可き左右

加藤肥後守

石場」

加藤肥後守の文字の長さは、36 cm

と25 cmで、甲の大きい。

写真2は、「大石小石」の南面にあり。 「榎」の刻印が明瞭で、左が

B「三左」と読める。

加藤肥後守は？・どこの城石？

「石場」別名石丁場は、採石場か石工事場である。小田原に加藤肥後守、すなわち築城の名大名加藤清正か、嗣子忠廣の「石場」があったことを物語っている。

では何時頃のことか。清正は秀吉の「小田原攻」に参陣しなかった。

親子が「肥後守」であったのは、清正が慶長八年(一六三三)から同一六年(没)、忠廣が慶長一七年(一六四二)から寛永九年(一六三二改易)の間である。清正は慶長一一年に江戸城、慶長

一五年に名古屋城石垣を築いた。忠廣は元和九年、寛永六年に江戸城天主台などの工事をしている。しかし彼らが石垣山城・小田原城の石垣工事を命ぜられた記録はない。

ところが、写真1乙の石が石垣山城にあり、小田原城住吉橋橋台の石垣の中に写真2とおなじ「榎」の刻印石があった(『小田原市史』城郭編 p.三三)ということはどうか解釈したらいいのだろうか。

また、清正の家臣南条元宅の「榎」の刻印石が名古屋城にあり(山田秋衛『名古屋城』)、丹波篠山に「三左之内」や「榎」の刻印石がある(丹波篠山城とその周辺 p.11)ことも問題を複雑にする。

松平土佐守の刻銘石・刻印石

写真3は、昨年末大木允由氏の案内で南足柄市塚原向坂山中で確認したものである。松平土佐守は高知城主山内家二代忠義(慶長十年一六〇五から

久野上柳原の「大石小石」



一六三三隠居である。

刻銘文は、彼の石丁場の範囲を書いたもので、古絵図や古老を訪ねても四百年も昔の小字名なので確定出来なかつたが、独断的に要旨をまとめると次のようになる。

- ① 尾根の南は、谷川で切り、水垂り・下原まで。
- ② 北は大峯入り、舟帰口の北、狩野山切り、いりを下。
- ③ 松平土佐守の石丁場である。

写真4

山内氏の家紋刻印である。これで、山内忠義の採石場がここにあったことは決定的だ。

写真1 甲



写真1 乙

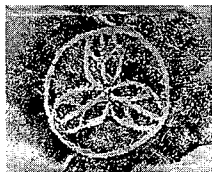
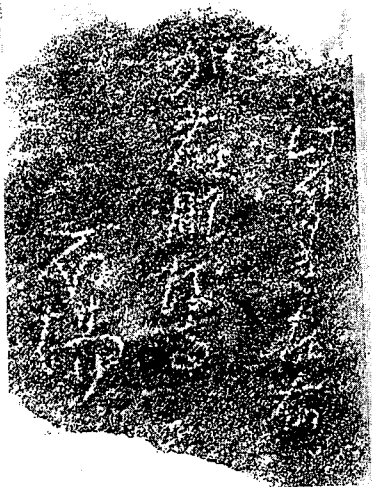


写真2



広がる山内忠義石場の謎

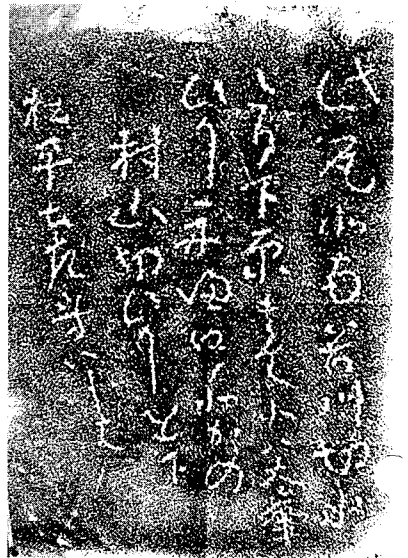
山内忠義と江戸城普請とのかわりを見ると、元和六年(一六三〇)に石三千余、寛永六年(一六五五)に石三三〇と百石積以上の石船三〇艘他を出しているが、以後石垣普請は免除されている(北原糸子『江戸城外堀物語』)。

しかし、これらの石は、東伊豆町稲取から採石されていたというのが定説で、現に「松平土佐守石場」の刻銘石もそちらに残っている。

もちろん、南足柄市塚原向坂石場は知られていない。ところが、向坂石場の南方約三〇〇mの、小田原市久野石小屋の小野薫氏所有林に山内氏の家紋刻印があった。直径が20cmと26cmで石小屋石場の方が大きいだけである。

ここで謎は二つになる。その一は、三千ばかりの築城石のために、小田原海岸から内陸へ10kmも入った山奥にまで採石場を作るかという事。(註) その二は採石年代と石の使用目的を明らかにすることである。

写真3



塚原・向坂 松平土佐守刻銘石

写真3解説文——小字名は確認済

称、ねカ

此尾北 南谷川切、水

たり、下原まで。北八大峯

いり 舟帰口ノ北、かの

村山切、いりと下。

松平土左(佐)守いし者

古文書の証言はどうか

南足柄市塚原の石川明世家の寛文一二年(一七二二)の「塚原村明細帳」が、村内にあった畑屋敷・窯土原・石畑・大畑の四石場を記している。(一)を私が補って、要点を記す次のようになる。

ア 四九年前子の年(寛永元・二空四)

小田原御普請があった。

イ 賀藤肥後守(加藤忠廣)・松平石

見守(池田輝澄)・松平右京(池田政

綱)・京極丹後守(高知・高広)・池

田備中(長幸)・濱田兵部(重恒)

らの石場だった。

ウ 御判切付けの石が沢山残る。

エ この外の大名や帳場境は不明。

しかし、寛永元年に小田原城の普請はない。この年、江戸城普請はあつたが、挙げられた四大名は大坂城の普請に動員されている。加藤忠廣はここにも出てくるが、山内忠義は出てこない。

という訳で、古文書も決め手になるより、謎を深めるだけである。当面は古文書にあるような刻印石の発見と、先学の研究を広く学びながら謎解きに勤めることとなろう。

注意してほしい語句

今回は刻銘・刻印石を扱ったが、

(片山文士「清正の政治」)。

肥後国から船で運ばれたとされている

誤

古文書講座29「最乗寺道了尊と辻村甚八郎」

「小田原史談」No.180 25P解説欄後から5行目

正

乗国寺様(茨城県結城市)

大松寺様(南足柄市竹松)

紫雲寺様(平塚市岡崎)

乗国寺様(茨城県石下町)

大松寺様(茨城県石下町)

柴雲寺様(平塚市岡崎)

誤

このいしかさきゆう 此石垣の左右

は、彫りが浅く細いので、チヨーク

や石灰を詰めたり、懐中電灯で影を

作ったりして文字をはっきりと捉え

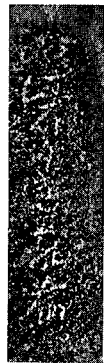
る。漢字と変体仮名の区別などが決

め手になる。「加藤肥後守が築く」と

単純に解釈しないこと。

石の風化、欠損などもあり、拓本だけを頼りにしては研究は進まない。現場に立つことを大事にしなから、あれこれ工夫をして文字や史実に迫らなくてはならない。

A



B 写真2参照

さんざ「三左之内」だったのが耕作や水害で摩滅したかもしれないとすると、この石は篠山城普請総奉行も勤める池田三左衛門輝政(慶長18年没)と加藤清正の石場境界石だった可能性もある。類例を発見したい。

(註) 旧説では、清正の江戸築城石は、肥後国から船で運ばれたとされている

# 震災日記

19

## 片岡永左衛門

大正十三年七月

九日 晴

十日 晴

毎日非常の暑さ。

十一日 晴

笠提灯の歌月に付き面白からず、焼き捨てんとせしに田辺より提灯を貰う。早速捨て焼く。

十二日 晴

又、史料を伝肇寺に行き、古文書借用、帰途久々に岡田氏に立ち寄り一時帰宅。夜に入り妻、下女と外出。板橋にて足を踏み川へ落ち入り濡れ鼠となり、下女はびっくり。しかし、負傷もなく大仕合大笑いとなる。

伝肇寺の垣根に佇立して

夏の日の暑もよそに立  
奇は風の涼しき松の下  
かけ

十三日 晴

霊棚の提灯に秋竹の絵付

けるを見て

花におく露か涙たかち  
やう灯の月かけもとうと  
きこれの霊棚

十四日 晴

午前、大蓮寺上人読經に  
来る。午後より横浜高田に  
行き円福寺に募参する。午  
後十二時帰宅。

十五日 雨

久々の雨にて諸人蘇生の  
思い。

十六日 雨

当町に於いて済生会病院  
跡にて実費診療と公設質屋  
を可決すと。実費診療は、  
近年医師の弊風の為、生活  
を脅かさる下民に必要と希  
望せしも経費の止むを得ざ  
りしに、今回震災救助の一  
部として政府筋了解を得て  
実行に至るも永久に存続し  
たし。

十七日 雨

十八日 雨

気分悪しく午後より帰宅  
床上に庭を見て

あちさいの花にかあら  
す庭木立すきまに見ゆ  
る空のるり色

御用邸も林野局に引渡済  
となり、裏御門内に林野局  
出張(所)建築の入札執行金  
老万式千円にて落札。材料  
は官給にて最乗寺山(南足  
柄市)より伐採すと。御用  
邸倒壊の古材は金八千円に  
て東京の吉田二郎落札す。

十九日 晴

高田尋子墓参に來たり午  
後帰宅。

二十日 晴

二十一日 晴

二十二日 晴

二十三日 晴

今朝出勤せしも午前帰宅  
暑気甚だし。

あらかねのとく日影  
をてり返し雄々しくも  
光る庭の枇杷の花

二十四日 晴

震災に就いては言う迄も  
なき非常の打撃なりしに復  
興は遅々と云うも、其の際  
より売れば飯令粗末とは云  
え、よくこれ迄に家屋の建  
築も出来しを思い。役場に  
調査せしに目下の現在は、  
四千六百四十七戸。此の内  
に空家八十一戸あり、震災  
前は五千三百八拾五戸。こ  
の内六十この明家有りたれ  
ば、凡そ壹割式分程の減少  
は、戸数に於いて成績不良と  
は思わずも町営はうづりも  
有り総て疎造ならば、坪数  
に於いては平均四分の一位  
は震前より減少なるくべき  
か、しかれども賃家を建て  
る者少なければ、家持ち震  
前より余程の増加なるべし。

二十五日 晴

二十六日 晴

二十七日 晴

二十八日 晴

夜に入り草山氏に行く。  
在宿。

二十九日 晴

三十日 晴

箱根に出掛けんと聞き合

わけしに、昨日迄は兩三日  
道路破損して不通なりし  
も、本日は通行出来べしと  
云はば乗合自動車に乗り、  
午前六時三十分小田原を  
発し三枚橋迄至れば、道路  
すべり込み車輪止まらず。  
止むを得ず徒歩し塔ノ沢乗  
合所に至り、着は湯本道の  
破損の為予定に狂いを生じ  
凡そ一時間待ち発車す。  
震前より道路の屈曲を増  
し、山は左右共に崩落の所  
多く惨々たり。

いたましき地震にくつ  
れしあとあかし しみ  
立つ木山草さ青き心の

宮ノ下に着すれば今発と  
する車は満員にて、また二  
時間も待つ。此の地も被害  
多大にて例年なりせば遊覧  
登山も多季時節なるに、甚  
だ淋しく冬きに異ならず、  
これよりは幾分被害も少な  
かりし様に思ふ。元箱根は  
被害少なき為か村柄のよき  
為か他に比し復旧し、箱根  
神社は御本社は震災にても  
格別の異常なし。

社頭にて

麓には堪ぬ暑さも箱根



山木間の渡る風は忘れし

神官早山茂氏に立寄り神社の歴史に就いて疑問大いに得る処あり。辞して中食し元宿に行き船に乗る。塔ヶ嶋離宮は被害は少く、存在すると船中より望見、箱根に着船す。此の地は復旧、元箱根に及ばず惨めなり。関所跡辺を一周し、近來新道路の出来し自動車の出る一日より開業したる乗る。乗合二十人なり。運転手の談に依れば、少なしとは云うも三嶋方面より登山するよりも小田原方面より来る者多しと。此の新道は静岡県の事業にて思い切つて屈曲したれば、湖西に別れては又逢い、逢いては又別れ、種々の方面より眺望甚だよ

きも新築して程を経ざれば、車は動揺して陸上の船の如し。一日の清遊をおわり三嶋より五時に乗車し、御殿場を巡り国府津にて乗換に一時を要し、九時に帰宅すれば、龍夫は関西旅行し帰途立寄り待ち居りしとのこと。

三十一日 晴  
草山氏来談。

八月一日 晴

二日 晴

三日 晴

高田父子三人にて来る。八重子は当分逗留。

四日 雨

去る十五日以来雨はな



ありし日の片岡夫妻

く、田畑も人も暑氣衰色あり皆喜ぶ。

五日 半雨

龍夫、去月の十一日帰京せしが、加奈子と来る。

六日 雨

七日 晴

八日 晴

雨の為か少し涼しく、例年より非常に蚊多かりしも少なくなる。

龍夫、加奈、八重、福浦へ行く。

九日 晴

子供三人福浦より帰る。

十日 晴

十一日 晴

12日から17日欠

十八日 晴

横浜高田より八重子迎えにとも子来たり泊まる。

十九日 晴

松隈義旗老母葬儀に会葬。高田子供兩人帰る。

二十日 晴

午前五時発にて鴨宮に下車、千代円宗寺に大黒天を拝し太田氏に由緒を訊ね、下曾我東光院に福原氏を訪問、史談を聞き五時帰宅。

二十一日 半雨

龍夫、かな兩人帰京。

二十三日 晴

小総の地名の国府津に至り長谷川村長と対談。村史編纂の田村氏に面会同行して宝金剛寺に行く。同寺も甚だしき破損、聖徳太子作と称する帯解地蔵を拝す、古文書有りと言うも今は無理、何の得るもなし。帰途小八幡の石井医師を訪問、酒匂に元屋敷あるを知り、従来疑問氷解。帰途南蔵寺に立ち寄るも得るものなし。

板橋地蔵、例年より人出甚だ多し。震災亡霊の一年の為か。

二十四日 晴

親一東京より来たり、兩人にて岡田氏に会葬、久々に同家親族に面会。

二十五日 雨

親一帰京。

二十六日 晴

岡田氏礼に来る。

二十七日 晴

二十八日 晴

二十九日 晴

震災以来樹木の手入れ出来掃除もなく邸内初めて綺麗となる。

三十日 晴

三十一日 晴

午前、親一、こよ兩人来着。親一は尾崎祐子一周忌仏事に行く。午後八時尾崎よし来る。

大蓮寺上人待夜の読経あり。露木次男も来る。今夜は大賑わいにて夜を更す。

(続)

今まで表題は、大正十二年九月一日の関東大地震から一年間は、『震災日記』としてきましたが、次号から本来の『片岡日記』に戻します。

紙面の都合により、隠岐威重氏の「日露戦役従軍記録書簡往来」、岡部忠夫氏の「紅蓮洞・坂本易徳」の稿は次号以下に繰り延べます。

# 街さまざま

## 神奈川新聞

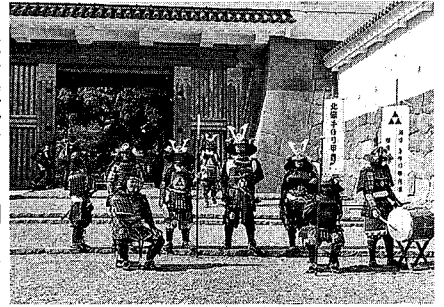
1月29日  
土曜日  
2000年(平成12年)  
神奈川新聞社  
第20721号

### 西相信金、さがみ信金へ譲渡

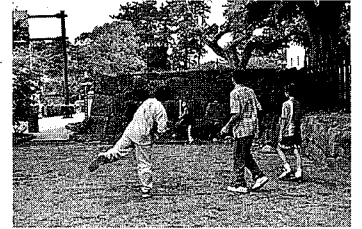
自力再建  
不況克服

12/24 クリスマスイブに御幸浜

武者隊勢揃い 銅門



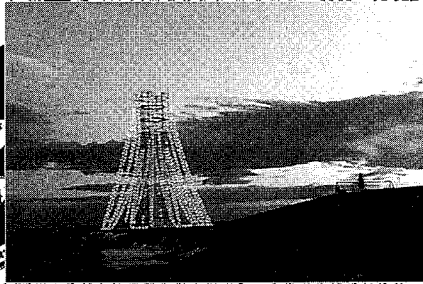
遊び場求めて 箱根口にて



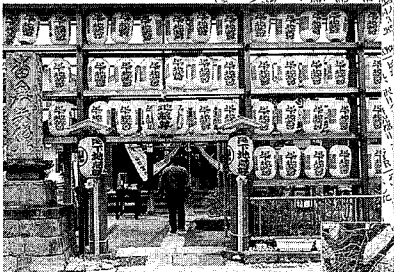
どんど焼 大稻前神社境内にて



閉店 栄町にて



元 県立芸指導所跡地



板橋・地藏尊



扇町二丁目  
足下地蔵

マンション建設反対  
本町一丁目二番  
(右手)



### 電線共同溝(C.C.BOX)整備工事

電線共同溝(C.C.BOX)整備工事

C.C.BOXの工事は、旧から電柱・電線をなくし、都市に安全とゆとりを生み出します。

C.C.BOXの機能

- 1. 電線保護機能: 電線が破損・断線・感電の危険を防止します。
- 2. 電線整理機能: 電線をきれいに整理し、見栄えを良くします。
- 3. 電線管理機能: 電線の位置・状態を把握し、メンテナンスが容易になります。

発注者 建設局 横浜国道工事事務所 小田原出張所 施工者 浜田道路株式会社

電線共同溝整備工事PR板 南町にて

お願い

埋蔵文化財の発掘調査中です。しばらくの間、ご迷惑をおかけしますが、ご理解とご協力をお願いします。

道跡発掘調査団  
連絡先 玉川文化財研究所  
TEL 045-324-5565

# 新刊紹介

## ◇開成町史 通史編

A5 志四ページ及び

開成町史年表表紙ページ

定価 五千円

編集・発行 開成町

二二五—〇〇六

神奈川県開成町延沢七三

〇四六九 二二五—〇〇六

本書の構成は、古代中世・近世・近現代の三部に分け無土器時代から昭和六十年までのことを一巻にまとめ、巻末には「開成町史年表」を付してある。

なお、平成初年度から始

## 開成町史

通史編

まとった町史刊行事業は、十一年度の通史編の発行で完結。限られた狭い範囲の町内だけに資料の収集や聞き取りにお骨折りがあつたと思う。その外、町外の資料集めに苦勞があつたに違いない。それを十一年間以上続けて来たわけである。これで町内に散在する貴重な資料は、日の目を見た訳になり、また、利用する人々

の便宜は、この上もない。この調査研究を實際に当られ、その上、執筆をもされた編集委員長瀬戸崎雄氏、それを支えた方々にひそかに敬意を表す次第である。

ちなみに、発行された町史は、第一巻資料編(古代・中世(近世1))、第二巻資料編(近世2)、第三巻資料編(近代・現代)、第四巻通史編、第五巻民俗編の全五巻で、

価格は各巻とも五千円。小田原市内の各書店で販売されているが、遠隔地で購入希望の方は、上記開成町役場に問い合わせるとよい。

## 史跡めぐりご案内

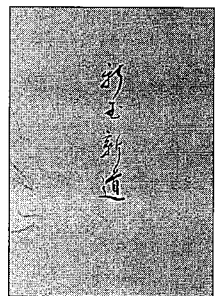
平成12年度の史跡めぐりを次のように計画いたしました。

予め日程が分かっていたら参加出来たのという声がありましたので、本年度は、年間予定の月日を総て確定いたしました。ふるってご参加ください。

- ① 小田原市内 5月18日(木)
  - ・前川方面 長泉寺、常念寺など
  - ・講師 船津常治氏、石塚勝治氏
  - ・国府津駅前集合
- ② 県内 6月8日(木)
  - ・大磯方面
  - ・大磯駅前集合
- ③ 県外 9月21日(木)
  - ・岡崎方面
  - ・小田原駅前集合 バス利用
- ④ 一泊見学 11月9日(木)~10日(金)
  - ・伊賀上野方面
  - ・小田原駅前集合 バス利用
- ⑤ 初詣 1月18日(木)
  - ・熱田神宮、徳川美術館
  - ・小田原駅前集合 バス利用

## ◇歌集「新玉新道」

著者 中川 禮子



筆者が折ふしにまとめたものである。文語、旧仮名、正漢字、リズム、叙情性などが、いつしか若い世代への申し送る内容となっているが、また、一つの日本文化として、外国へも発信できるものとなっている。

## 小田原史談会行事

初詣 (月日)平成12年 1月23日(日)

(コース) 7時20分小田原駅前集合、7時30分駅前出発  
 発 小田原厚木道路小田原  
 厚木 IC 東名高速道路港北 PA 首都高速 明治神宮  
 目黒不動 青木昆陽墓 豪徳寺(昼食) 首都高速 海老名 SA 厚木 IC 小田原厚木道路小田原北 IC 小田原駅前16時25分着  
 [参加費] 三千八百円  
 [参加者] 岡部忠夫、山口

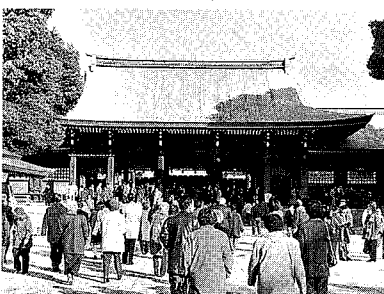
## 訃報

豊住芳三さん(小田原市東町四—二十七) 去る十二月二十日逝去されました 享年八十五歳

高橋義寛さん(玉泉寺住職・小田原市田島五七七) 去る十二月二十日逝去されました 享年八十一歳

ご冥福をお祈りいたします

明治神宮



一夫、勝俣淳一郎、曾我保夫、向山重忠、和田治助、吉池清、中田智・郁子、小林房子、本田トキエ、本田チエ、額田好男・常子、中野恒郎・文子、秋本央、岩本武、増田任司・頼子、木

特別賛助会員

智恵袋 相田酒造店  
小田原銀座 アオキ西廊  
 熱海 アオキクリニック  
 足柄香粧株式会社  
 飛多屋  
 紳士服の **アメリカヤ**  
 (株) アルファ  
 伝統工芸 **石川漆器(株)**  
 税理士 石原和夫事務所  
 伊勢治書店  
 ●伊豆箱根トラベル小田原  
 画材 ガクブチ **ゆうえ**  
 ●かまぼこ  
株式会社 小田原魚市場  
 ●小田原ガス  
 小田原市農業協同組合  
 小田原報徳自動車  
株式会社 オートセンター・スギヤマ  
 オリオン座  
 かまぼこ 籠 清  
 鐘紡株式会社小田原工場  
 カネボウ化粧品鶴宮工場  
 神尾食品工業株式会社  
 木地挽 日下部産業株式会社  
 かみやま小児科クリニック  
 興電社  
 小伊勢屋  
 国府津館  
 (有)小松石材店  
 さがみ信用金庫  
 崎村学院  
 趣味のこふく さくらい

● **正栄堂**  
 小田原 **かまぼこ**  
 匠寿堂スポーツ  
 大営不動産  
 打うどん 小田原城趾前 田毎  
網元直営 **あゝる海**  
 ● **そびそ二宮**  
 茶半家具株式会社  
 ちんろう本店  
 土谷建設株式会社  
 角田ガクブチ店  
 東京電力(株)小田原営業所  
 株式会社 東華軒  
 トーホー建物 蠶  
 鳥かつ 樓花  
 和菓子 菜の 店  
 八小堂 書  
 八子 マサ  
 平井 書店  
 株式会社 報徳  
建築金物 家庭金物 (株)星崎仲吉商店  
 本多時計店  
 ● **松坂屋**  
 学生専科 ● **カマルク**  
 諸星運輸グループ  
株式会社 美濃屋吉兵衛商店  
曾我の梅子 蘆羊・かまぼこ 美の政  
 みみづく幼稚園  
 やオマサ株式会社  
 山口菓子舗  
 防災器具 優光社



青木昆陽の墓



目黒不動尊

田口鏡子、劍持和子、蛭間  
 節子、藤沼キク子、湯川玲  
 子、植村法子、田中千恵子、  
 安藤繁美・峯三、川添ヨシ  
 子、早野光子、福田愛子、  
 伏見弘、鶴井道泰、川添純  
 子、山口廣子、劍持芳枝、  
 喜多村幸子、三橋国雄・フ  
 サ子、高田ヒデ、中尾佳子、  
 朝倉忠雄、船津常治・利江  
 以上五十四名  
 (敬称略・順不同)



豪徳寺



豪徳寺

村八重子、形岡タミ子、加  
 藤松江、勝俣末子、石川タ  
 カ子、劍持公一、和子、早  
 野廣司・尊子、内田美枝子、

小田原史談(年四回発行)

年会費 普通会員三千円